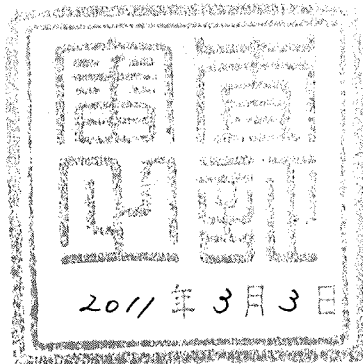


宮脇檀の住宅地計画・設計の考え方



2011 年

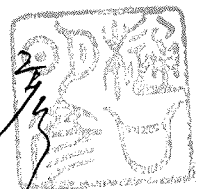
九州大学工学部
地球環境工学科
建設都市工学コース

小川 正人

S. Kudo
2011.2.24



植 田 明彦



宮脇檀の住宅地計画・設計の考え方

第1章 はじめに 1

- 1.1 背景
- 1.2 目的
- 1.3 既往研究
- 1.4 研究方法
 - 1.4.1 研究の構成
 - 1.4.2 調査方法

第2章 住宅地に関わるまでの経歴と建築家としての考え方 8

- 2.1 デザイン志向の家庭からの影響
 - 2.1.1 家庭における父の影響
 - 2.1.2 建築学科進学の際の経緯
- 2.2 恩師・吉村順三の影響
 - 2.2.1 吉村順三について
 - 2.2.2 吉村順三の建築に関する考え方
 - 2.2.3 宮脇が吉村から受けた影響
- 2.3 都市計画に対する意識の醸成
 - 2.3.1 宮脇が都市計画を考えたきっかけ
 - 2.3.2 高山英華について
 - 2.3.3 宮脇が高山英華から受けた影響
 - 2.3.4 都市計画に対する問題意識
- 2.4 住宅設計に対する考え方（ボックスシリーズ）
- 2.5 街並みの「日本らしさ」に対する理解
 - 2.5.1 デザイン・サーベイから学んだこと
 - 2.5.2 宮脇がデザイン・サーベイで得たもの
- 2.6 小結

第3章 住宅地の計画・設計を通して考えたこと 16

- 3.1 はじめに
- 3.2 事例分析
 - 3.2.1 コモンライフおさゆき
 - 3.2.2 高須ボンエルフ
 - 3.2.3 高幡鹿島台ガーデン 54
 - 3.2.4 明野ボンエルフ
 - 3.2.5 青葉台ボンエルフ
 - 3.2.6 諏訪野
 - 3.2.7 フォレストエッジ高幡鹿島台
- 3.3 小結

第4章 宮脇檀の住宅地計画・設計の考え方 43

- 4.1 人のための空間をつくる
- 4.2 日本らしい街並みをつくる
- 4.3 集まれる場所をつくる
- 4.4 時間に育まれる風景をつくる
- 4.5 小結

第5章 結論 48

- 5.1 本研究の成果
- 5.2 今後の課題

謝辞

付録

- 試問会用 ppt
- ヒアリング結果

第1章 はじめに

1.1 背景

宮脇檀は1970年代後半から活躍した建築家で、特に住宅作家として社会的評価が高い。宮脇の設計する住宅は、モダニズム建築の時代にあつて住民の生活を見つめた設計がなされているという評価を受けている。その一方、宮脇は戸建て住宅地の設計にも携わっており、62件の事例を残している。

宮脇の住宅単体に対する建築家としての評価は、学術研究や建築雑誌の論考で多数なされている。また宮脇の設計した住宅地に関しては、その管理のマネジメントを題材に研究が積み上げられている。しかし、宮脇が住宅地をどのように計画・設計したかに関しては十分な研究はなされていない。

1.2 目的

本研究では、まず、住宅地に関わるまでの宮脇の経歴と建築家としての考え方を文献より明らかにし、さらに、宮脇が住宅地計画・設計を通して考えたについて事例分析を行い、その上で、宮脇の戸建て住宅地計画・設計の考え方を明らかにする。

1.3 既往研究

建築家・宮脇檀に関する研究や宮脇檀が計画、設計した作品に関する研究や文献を大別すれば、宮脇檀の設計思想に関する研究、宮脇檀の設計した住宅地を事後評価した研究、宮脇檀の設計した住宅地の住環境マネジメントに関する研究、が挙げられる。

1.3.1 宮脇檀の設計思想に関する研究・文献

(1) 隈翔平、土居善岳「建築家の「社会性」とは何か 宮脇檀を通して」¹⁾

(目的)

- ・ 宮脇檀が、社会に対してどのような感情を抱き、彼の建築論、作品にどのように反映されたのかを見ていくことから、宮脇檀の「社会性」、つまり社会に対する意識のあり方を考察する。

(結論)

- ・ 脇檀は社会に対して何らかの感情を持ち、そこから建築論を確かに生み出していた。
- ・ 作品においても、自らの建築の社会での位置を主張していた。

(2) 吉野雅大、高井宏之「宮脇檀の住宅作品の設計理念と計画特性」²⁾

(目的)

- ・ 宮脇の著作の中の言説から見られる設計理念と作品の計画特性を明らかにすること。

(結論)

- ・ それぞれの言説が選択される時の条件を知ることができた。

(3) 鈴木善暁、波多野純、「宮脇檀の混構造とその論理の変遷」³⁾

(目的)

- ・ 宮脇檀の作品と言説の変遷に着目し、混構造の論理がいかに構築されてきたかを明らかにする。

(結論)

- ・ 上下分離型、入れ子型の二つの類型があることを明らかにし、形態を先行させた設計時代と、理論を先行させた設計時代が交差している傾向を明らかにした。

(4) 宮脇檀建築研究室「宮脇檀の住宅設計ノウハウ」⁴⁾

- ・ 宮脇の設計した建築の写真や、図面を掲載しながら、住宅における各要素の設計の考え方を示している。

(5) 宮脇塾講師室編著「目を養い手を練れ」⁵⁾

- ・ 宮脇が日本大学生産工学部建築工学科で開設していた「居住空間デザインコース」での内容をまとめたもの。
- ・ コンセプト設定から図面の書き方まで宮脇の講義内容がまとめられている。

1.3.2 宮脇檀の設計した住宅地を事後評価した研究・文献

(1) 田中宏弥, 柴田建, 菊地成朋「青葉台ボンエルフにおけるコモン広場の価値と変容」⁶⁾

(目的)

- ・ 入居から15年経過した青葉台ボンエルフを対象に, コモン広場の価値とその変容を考察する。

(結論)

- ・ 活動の場としての価値だけでなく, 時間経過の中で気配を感じあう場という新しい価値も生まれてきている。

(2) 東方琢也, 柴田建, 菊地成朋「宮脇檀による住宅地計画手法の変遷と実態から見たその評価」⁷⁾

(目的)

- ・ 住宅地計画手法の変遷を見る, その後各住宅地の現状と住民組織の役割を検証した上で, 宮脇の住宅地設計手法に対する評価を試みる。

(結果)

- ・ 宮脇檀の住宅地計画手法は, 街並みをテーマに住環境全体をデザインし, 居住者が働きかける余地をなくす方向へと発展していった。
- ・ 居住者の働きかけを前提とした議論も必要。

(3) 島屋由美子, 斉藤広子, 中野 迪代, 越智恵理, 松下江里「可児市桜ヶ丘ハイツにおける戸建て住宅地計画に対する居住者の評価」⁸⁾

(目的)

- ・ 街並み, 景観を重視して作られた住宅地の計画を居住者が生活や利用を通じて, どのように評価しているかを明らかにする。

(結論)

- ・ 街並みや景観を考慮した住宅地計画の居住者の評価は景観上高いものの, 管理上の負担の大きいものについては, それを管理していくことの自覚も低く評価も低い。
- ・ 利用や管理を考慮した計画, 維持・保全していくためのシステム設定が課題。

(4) 諫山由紀子, 黒瀬重幸「福岡市および北九州市における成熟した郊外住宅地に関する研究」⁹⁾

(目的)

- ・ 宮脇檀の取り組んだ理想の郊外住宅地が何を重視して設計され, それらのデザインは年代とともにどの様に変化したかを調査し分析する。
- ・ それらの住宅地の周辺環境, 住民意識はどのように変化したかを調査し分析する。

(結論)

- ・ 宮脇檀が計画したような成熟した郊外住宅地であれば, 今後も都市にとって重要な要素として, 維持していける。

1.3.3 宮脇檀の設計した住宅地の住環境マネジメントに関する研究

(1) 柴田建, 菊地成朋「街並み計画型戸建て住宅地における住環境マネジメントに関する研究」¹⁰⁾

(目的)

- ・ 持続的な住環境マネジメントのポテンシャルについて考察すること。

(結論)

- ・ 維持型のマネジメントと誘導型マネジメントが存在した。

- ・ 居住者が共同で地区の将来像を描くような活動が必要。

(2) 東方琢也, 菊地成朋, 柴田建「高須ボンエルフにおける住環境マネジメントの形成」¹¹⁾

(目的)

- ・ 住環境に関する様々な行為を調整し, 変化の方向を導く働きを住環境マネジメントとして捉え, その形成を見る。

(結論)

- ・ 住みこなす過程でコミュニティが形成され, ルールは更に適応性のあるものへ変化した。
- ・ 居住者自身が状況に合わせてルールと住空間とをうまく調整していくマネジメントを行っている。

(3) 斉藤広子, 島屋由美子「戸建て住宅地の街並み形成における建築協定と地区計画の効果」¹²⁾

(目的)

- ・ 街並み形成方法の一つとして法に基づく制度の運用や地域で決めるルールづくりを取り上げる。
- ・ 建築協定や地区計画制度の有効性を明らかにする。

(結論)

- ・ 建築協定や地区計画制度が運用されている場合, それぞれに含まれる項目については一定の効果が見られる。
- ・ 建築協定や地区整備計画の見直しや, 管理の方法や利用の仕方等幅広い項目を含んだルールやまちづくり協定等が必要。

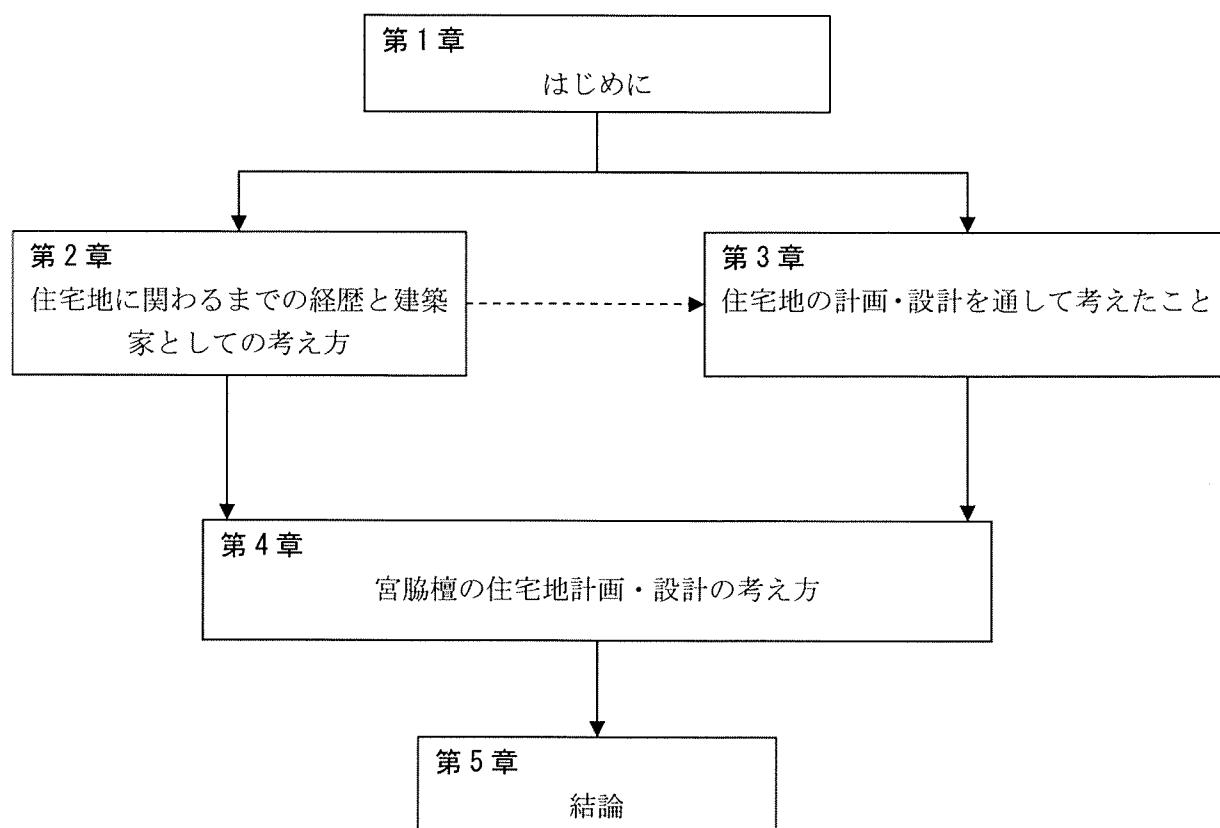
以上から, 宮脇檀に関する研究や宮脇檀が計画, 設計した作品に関する研究は, 単体の住宅設計を主な対象としており, 住宅地に関する研究は少なくない。住宅地に関する研究としては, 主に住人による住宅地の評価を分析した研究や, 宮脇が計画・設計した住宅地を事例として, その維持管理体制の現況と課題を明らかにした研究があるが, 宮脇檀による住宅地計画, 設計の考え方を対象とした研究はない。

住宅の集合体であり, 道路や広場等を含む, 住宅地は住宅と比べてより公共性の高い性質を持っており, 住宅設計に関する考え方と, 住宅地設計に関する考え方には, 共通する部分と異なる部分があると考えられる。本研究は住宅地に着目して, 宮脇檀の計画や設計の考え方を明らかにすることにより, これまでの住宅を中心とした建築家・宮脇檀に対する評価研究に, 新しい知見を与えることを目的としている。

1.4 研究方法

1.4.1 研究の構成

本研究の位置づけ（第1章）を示し、住宅地設計に携わるまでの経験を宮脇や吉村順三、高山英華に関する文献をテキスト分析することにより整理する、そしてその時点で宮脇が都市や住宅、まちなみに対して持っていた考えを明らかにする（第2章）。その後、宮脇の持っていた考え方を考慮しつつ平面図、現地調査、事例に関する宮脇の言説をもとに事例分析をおこない宮脇の住宅地設計手法が成立する過程を分析する（第3章）。次に2章、3章の内容を踏まえ、宮脇が持っていた住宅地計画・設計の考え方を考察する（第4章）。最後に研究により得られた知見をまとめ、今後の展開を示す（第5章）。



4.2 調査方法

(1) テキスト分析

以下に示す資料をテキスト分析した。住宅設計に関する言説を抽出し、その設計の考え方を分析した。

表 1-1 テキスト分析を行った書籍一覧

著者	書名	発行年	出版元
宮脇檀	作る術について5人のデザイナーたちと語った	1976	新建築社
宮脇檀編著	日本の住宅設計	1976	彰国社
吉村順三・宮脇檀	吉村順三のディテール 住宅を矩計で考える	1979	彰国社
宮脇檀	新 3LDK の家族学	1982	グロービュー社
宮脇檀	日曜日の居住学	1983	丸善株式会社
宮脇檀	旅は俗悪がいい	1984	グロービュー社
宮脇檀	住まいとほどよくつき合う	1986	新潮社
宮脇檀	宮脇檀の住宅設計ノウハウ	1987	丸善株式会社
宮脇檀	それでも建てたい家	1991	新潮社
宮脇檀	都市に住みたい	1992	PHP 研究所
吉村順三・宮脇檀ら	吉村順三を囲んで	1992	TOTO 出版
宮脇檀建築研究室	宮脇檀の住宅設計テキスト	1993	丸善株式会社
宮脇檀	度々の旅	1993	PHP
宮脇檀	住まいのプロ七人と語る－宮脇檀・対話と作品	1993	住宅新報社
宮脇檀	暮らしをデザインする	1995	丸善株式会社
宮脇檀	都市の快適住居学	1996	PHP
宮脇檀	男と女の家	1998	新潮選書
宮脇檀	宮脇檀の「いい家」の本	1998	PHP 研究所
ギャラリー間	住宅という場所で	2000	TOTO 出版
宮脇塾講師室編著	目を養い手を練れ	2003	彰国社
宮脇檀	日本の伝統的都市空間	2003	中央公論美術出版
吉村順三他	吉村順三を囲んで	1992	TOTO 出版
高山英華	私の都市工学	1987	東京大学出版会
吉村順三	火と水と木の詩	2008	新潮社
住宅生産振興財団	日本のコモンとボンエルフ	2001	日経事業出版社
宮脇檀建築研究室	コモンで街をつくる	1999	丸善プラネット
角野幸博	郊外の 20 世紀	2000	学芸出版社
斉藤広子・中城康彦	コモンでつくる住まい・まち・人	2004	彰国社

表 1-2 テキスト分析を行った雑誌記事一覧

誌名	記事	出版元
別冊新建築	現代日本建築科シリーズ①宮脇檀(1980)	新建築社
別冊新建築	現代日本建築科シリーズ⑦吉村順三(1983)	新建築社
家と街並み	No.13 1983 4 月 pp4-14	住宅生産振興財団
家と街並み	No.10 1982 7 月 pp9-20	住宅生産振興財団
家と街並み	No.12 1983 1 月 pp4-33	住宅生産振興財団
家と街並み	No.16 1984 1 月 pp26-30	住宅生産振興財団
家と街並み	No.18 1984 8 月 pp40-43	住宅生産振興財団
家と街並み	No.19 1985 1 月 pp7-12	住宅生産振興財団
家と街並み	No.24 1987 7 月 pp5-8	住宅生産振興財団
家と街並み	No.25 1987 12 月 pp22-25	住宅生産振興財団
家と街並み	No.25 1987 12 月 pp31-34	住宅生産振興財団
家と街並み	No.32 1995 10 月 pp68-70	住宅生産振興財団
家と街並み	No.33 1996 3 月 pp16-21	住宅生産振興財団
家と街並み	No.40 1999 9 月 pp53-58	住宅生産振興財団
都市住宅	1985 年 8 月 pp22-66	鹿島出版会
建築雑誌	No.1371 1995 4 月 pp24-33	日本建築学会
建築雑誌	No.1217 1984 2 月 pp7-8	日本建築学会
建築雑誌	No.1157 1979 11 月 pp32-33	日本建築学会
街並み大学講義録	No.1 1996 pp49-63	住宅生産振興財団
街並み大学講義録	No.1 1996 pp65-78	住宅生産振興財団
街並み大学講義録	No.2 1998 pp29-39	住宅生産振興財団

(2) ヒアリング調査

ヒアリング対象者：平山郁朗氏（ランドプランナーズ代表 元宮脇建築研究室アーバンセクション職員）

調査日時：2010 年 11 月 19 日(金)10:00-13:00

調査場所：ランドプランナーズ事務所（東京都渋谷区）

調査内容：宮脇建築研究室としての住宅地設計の当事者として、当時の設計に携わる際の状況を調査した。ヒアリング調査項目と調査結果は付録に示す。

(3) 現地調査

調査対象・調査日時：

コモンライフおさゆき（福岡県北九州市）：2010 年 10 月 22 日 9:00-15:30

コモンライフ新宮浜（福岡県粕屋郡）：2010 年 10 月 22 日 9:00-15:30

高須ボンエルフ（福岡県北九州市）：2010 年 10 月 22 日 9:00-15:30

青葉台ボンエルフ（福岡県北九州市）：2010 年 10 月 22 日 9:00-15:30

高幡鹿島台ガーデン 54（東京都日野市）：2010 年 11 月 18 日 13:30-15:30

フォレストエッジ高幡鹿島台（東京都日野市）：2010 年 11 月 18 日 13:30-15:30

調査方法：現地調査においては、それぞれの住宅地の現状を確認し、写真により記録した。

引用文献

- 1) 隈翔平, 土居善岳: 建築家の「社会性」とは何か 宮脇檀を通して, 日本建築学会九州支部研究報告, 第 46 号, pp789-792, 2007
- 2) 吉野雅大, 高井宏之: 宮脇檀の住宅作品の設計理念と計画特性, 日本建築学会計画系論文集, 第 616 号, pp31-37, 2007
- 3) 鈴木善暁, 波多野純: 宮脇檀の混構造とその理論の変遷, 日本建築学会関東支部研究報告集, pp577-580, 2002
- 4) 宮脇檀の住宅設計ノウハウ 宮脇檀建築研究室 1992 丸善
- 5) 目を養い手を練れ 宮脇檀塾講師室 2003 彰国社
- 6) 田中宏弥, 柴田建, 菊地成朋: 青葉台ボンエルフにおけるコモン広場の価値と変容, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp215-216, 2008
- 7) 東方琢也, 柴田建, 菊地成朋: 宮脇檀による住宅地計画手法の変遷と実態から見たその評価, 日本建築学会九州支部研究報告, 第 40 号, pp133-136, 2001
- 8) 島屋由美子, 斉藤広子, 中野 迪代, 越智恵理, 松下江里: 可児市桜ヶ丘ハイツにおける戸建て住宅地計画に対する居住者の評価, 日本建築学会東海支部研究報告, pp645-648, 1995
- 9) 諫山由紀子, 黒瀬重幸: 福岡市および北九州市における成熟した郊外住宅地に関する研究, 日本建築学会九州支部研究報告, 第 47 号, pp641-644, 2008
- 10) 柴田建, 菊地成朋: 街並み計画型戸建て住宅地における住環境マネジメントに関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 558 号, pp95-101, 2002
- 11) 東方琢也, 菊地成朋, 柴田建: 高須ボンエルフにおける住環境マネジメントの形成, 日本建築学会九州支部研究報告, 第 39 号, pp25-28, 2000
- 12) 斉藤広子, 島屋由美子: 戸建て住宅地の街並み形成における建築協定と地区計画の効果, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp489-490, 1995

第2章 住宅地に関わるまでの経歴と建築家としての考え方

宮脇が住宅地設計に初めて携わったのは40歳のときであった。当然、それまでの宮脇の経験やその中で培われた考え方がその後の62件の住宅地設計のベースとなっていたであろう。この章では、40歳で初めて住宅地設計に携わるまでの宮脇の人生を追いながら、宮脇が住宅地設計に携わるにあたって、建築、都市、街並み、住宅に対してどのような考えを持っていたのかを明らかにする。なお、表2-1に、宮脇が誕生した昭和9（1936）年から住宅地設計に初めて携わった昭和52（1977）年までの経歴を整理した。

表 2-1 住宅地に携わるまでの宮脇檀の経歴

年代	経歴	宮脇が受けた影響	当時を振り返った宮脇の言葉
1955 1959	東京藝術大学 (吉村順三に師事)	・ 建築に関わるようになる ・ リアリティのあるものづくりに対する意識の形成	「僕は数多い吉村ディテールの中から建築と人間に対する愛情、こまやかさの大事さをどれくらい学んだだろうか。」
1959 1961	東京大学大学院 (高山英華に師事)	・ 都市計画の経験 ・ 都市計画の手法への疑問 ・ 様々な要素を総合的に考える思考の醸成	「都市計画とは交通網計画に用途地域をぶっ掛ければおしまい、後は色を塗ってパースをかくて、最後にレポートを書いちゃうというやつです。あのへんのリアリティの薄さというのは、何か物を作っていく人間にはすごくいやだったんです。」
1961 1964	朝吹建築事務所		
1966 1973	日本各地の集落について デザイン・サーベイ (倉敷、馬籠、南古萩、 五箇荘、琴平、稗田、室 津、丹波篠山、平福)	・ 日本の美しい街並みの形成条件の解明 ・ 周囲と調和した建築の設計への意識の始まり	「それまでは、掃きだめに鶴が単体として降りて来るなんて思っていたんですが隣と並べたときにどうい問題が起きるかということを考えはじめたのはその辺からだと思います。」
1971 1971	ボックスシリーズ	・ 都市に関する問題意識に対する建築家としての答え ・ 松川ボックスで建築学会賞受賞	「ボックスが外界から切り離され、断絶した内部空間を獲得しようという姿勢であったのは、外部空間の悪化に対する逃げの姿勢からであった。ひたすらに内にこもり内部に完結した空間を求めている。」
1977	住宅地設計開始	第3章で取り扱う	

2.1 デザイン志向の家庭からの影響

2.1.1 家庭における父の影響

宮脇は昭和 11 (1936) 年に名古屋市に生まれる。父親は、画家をしつつ学校の教師をしており、また母親は後にアップリケ作家として知られるようになる。宮脇の父親はデッサンをする際には常に宮脇にもデッサンさせていた。こうした父の影響について、後に宮脇は「考えるよりも先に手が動いて後から頭が追いついてくる」と語っている¹⁾。

2.1.2 建築学科進学の際

終戦を迎え、宮脇は肖像画を描いていたが、アメリカ人将校を描いた際に大変喜ばれ、それからアメリカ人が家に訪問してくるようになり、アメリカの雑誌が手に入るようになった。それらの雑誌に載っているアメリカの美しい工業製品をみて、宮脇はデザインに興味を持つようになった²⁾。

そして、宮脇が高校 3 年のとき、宮脇の父親が学校に講演に来た柳宗理に対し「息子に ID をやらせたいんだけど、どういう学校に行ってどういう勉強をしたら一番いいんだろうか」とたずね、それに対し柳宗理が「今世界で ID をやっている連中を見ると、全員建築出身である。だから建築科に行くべきではないか。建築も普通の工学部系の建築科じゃダメだから、芸大の建築科に行きなさい」とアドバイスしたため芸大の建築科に進学することとなった³⁾。

2.2 恩師・吉村順三の影響

日本が高度経済成長期に入っていく昭和 30 (1955) 年に宮脇は東京藝術大学建築科に入学する。そこでは、吉田五十八や吉村順三らの教育を受ける。特に宮脇に大きな影響を与えたのは吉村順三であった。

2.2.1 吉村順三について

(1) 吉村順三が建築に関わったきっかけ

吉村は、自分が建築家になった理由について以下のように述べている⁴⁾。

関東大震災を経験して強い建物を作らなければならないと考えたのに加え、だだっ広い商人の家の中に快適な空間がなく、子供の時に家の中で襖や机を使ってそこを自分の場所に使っていた。

建築雑誌で見た住宅プランが面白くてプランづくりのとりこになった。

このような発言から、吉村の建築へのアプローチは自分の周辺の空間や、建物内部の構成などが起点となっていることが読み取れ、こういった身体体験に近いところから吉村の建築への関わりが始まったことがうかがえる。

(2) 海外から日本の建築を見る経験

吉村は芸術学校時代に朝鮮へ旅行をして、旅行で日本と朝鮮の風土が違うことを知った。それと同様に建築も日本と朝鮮で異なっており風土や習慣により建築のあり方も変わること気づいた⁵⁾。

また、吉村は戦後まもなくヨーロッパへ旅行し、それまではクラシックな建築がなじまないと感じていたが、本場で見ると石の建築に感動したと述べている。このように、他の国への旅行とその際に見た建築から、建築はその土地で生まれ、成り立つものであるという考えを持つようになった⁶⁾。

それに加え、吉村はアメリカで設計の経験している。吉村は技術学校卒業後、学生時代から通っていたアントニオ・レーモンドの建築事務所に勤務した。その後、第二次世界大戦前の情勢悪化により、アメリカへ帰国したレーモンドに吉村も同行し渡米した⁷⁾。吉村はアメリカでの経験から以下のようなことを学んだと述べている⁸⁾。

コロニアルの建築は、そこに真剣さがあって非常に美しいと思います。愛情という言葉が悪いのだけれど……誠意かな。本当に誠意を持って造った物は、本物だという感じを得ました。

また、それに加えて海外で生活することにより外から日本を見ることが出来たため、日本の建築の良さを再発見したとも述べている。

③ 吉村順三の作品

吉村は日本的な建築を残した建築家として知られている。吉村の目指した日本的建築というのは、その当時、堀口捨巳や吉田五十八が行っていた書院造や数奇屋づくりといった形式を踏襲するものではなく、壁や襖などの日本建築の「面」の組み合わせと「柱」の関係を基調としたところに現れている⁹⁾。

さらに宮脇が東京藝大に入学した前年の昭和 29(1954)年にはニューヨーク近代美術館の中庭に展示する日本建築を設計した¹⁰⁾。光浄院客殿を見本として書院造の日本建築を設計し、さらに、日本建築があるのにふさわしい空間とするため周囲を土堀で囲い日本庭園まで作った¹¹⁾。ニューヨーク近代美術館の設計を行って以降、国際文化会館やホテル・オン・ザ・マウンテンなどを設計し、国内からも海外からも注目も集めるようになった時期であった¹²⁾。

2.2.2. 吉村順三の建築に関する考え方

吉村は、建築の設計に関して以下のように述べている¹³⁾¹⁴⁾。

人間の生活とか、そこに住む人の心理というものを、寸法によってあらわすのが、設計というものであって、設計が単なる製図ではないというのはこのことである。

僕はどんな小さな住宅でも本当に人間の生活の基本から設計する修練をしていれればと思います。

吉村は、モダニズム建築の中に日本様式を取り入れた建築をするという特徴と、建物の中で生活をする人間のことを考えた設計をする特徴をもった建築家であった¹⁵⁾。

宮脇が入学する時期には、吉村は日本には日本的な建築がふさわしいということや、生活者のための空間を作るべきだといった考え方を確立しており、社会からも認められた建築家であった。

2.2.3 宮脇が吉村から受けた影響

宮脇は吉村順三が自らに大きな影響を与えたことを認めて以下のように述べている¹⁶⁾。

ずいぶんいろいろな教師がたくさん居るらしいのだが、私にとっては卒業後の長い間の私を支配してしまう強さをもっている吉村先生が、やはり私の生涯の師なのであろう。

宮脇は吉村順三から建築への考え方について受けた影響を以下のように述べている¹⁷⁾。

吉村先生の建築を支えているのは、人間に対する愛情である(中略)僕は数多い吉村ディテールの中から建築と人間に対する愛情、こまやかさの大事さをどれくらい学んだだろうか。

2.3 都市計画に対する意識の醸成

2.3.1 宮脇が都市計画を考えたきっかけ

宮脇は、東京芸術大学卒業後、東京大学大学院建築学科に進学し、高山英華研究室に配属となる。

宮脇が東京大学大学院へ進学したのは都市工学科が設立される3年前の昭和34(1959)年のことだった。

高山は都市工学科の設立に動いていた時期であり、プランニングからデザインまで総合的に都市計画をするため研究室に図面を書ける人間を必要としていた¹⁸⁾。そこで芸大に声がかかった。これは、戦前から高山が都市計画を広めるため、東京教育大学、明治大学、東京都立大学、広島大学、東京藝術大学でも講義をしていたため¹⁹⁾、学校同士でのつながりがあったからだろう。

宮脇らが東京大学の大学院に進学するまで、芸大から東京大学の大学院に行った学生は中国からの留学生一人だけであった。そんな時、宮脇と、同期の曾根幸一は東京大学の高山英華研究室と丹下健三研究室にそれぞれ進学している。高山英華研究室、丹下健三研究室双方のちに都市工学科となる²⁰⁾。

この二人は、それまで芸大の卒業設計で都市計画を題材とする学生がいなかった時代に都市計画的問題に取り組んだ²¹⁾。宮脇は、卒業設計で名古屋市の市民センターを計画し、都市計画的問題に挑戦した。宮脇は「当時の芸大が個々の建築の質の高さばかりを評価する傾向にあることに対する対抗心があった」と語っている²²⁾。この卒業設計の内容も宮脇が高山研究室に入る要因になったと考えられる。

2.3.2 高山英華について

(1) 高山が都市計画に携わるようになる経緯

高山は大学の建築学科で、郊外の中流住宅の課題が出て設計をするが、実際の町を見ると、大震災後にバラックのような建物が立ち並び、通風や採光などは考えられていない状況を目の当たりにした²³⁾。こうした経験は、高山を建築から都市計画へ向かわせることとなり、高山は卒業論文で漁村についての調査をし、卒業設計も千葉の漁村の計画を提案した²⁴⁾。

(2) 高山の都市計画家としての歩み

高山は大学卒業後すぐに助手になり、都市は全てのことが関わるということから文学部、法学部、医学部、工学部、理学部の教授たちで都市学会を設立して四谷のスラムを対象とした総合研究をした。そして、戦後にはこの学会は全国へ展開していく²⁵⁾。

高山は理想としていた、他分野の成果を生かして都市を作るというトータルな都市計画を実現するため、昭和37(1962)年に大学内に都市工学科を設立する。当初は全学部から講座を1つずつ出して構成する予定であったが、結果的には工学部の建築と土木から講座を出すということになり、様々な学部が共同で都市計画を行うという当初の目的は果たされなかった²⁶⁾。

高山は都市には建築や、道路、鉄道、上下水道などの要素があるが、それらが関係しあって成り立っているのだから、総合的に見る視点が必要だと考えており、以下のように述べている²⁷⁾。

そういう分野の成果をいただいて、こちらの都市を構築する技術を使って、そこでコントロールするのが都市計画だというのが僕の持論なんだ。

昭和30年代に発生してきた都市のスプロール現象が出てきたため、そのスプロール現象への対応として、高山は「都市計画の方法」という論文を発表し、その中で密度、配置、動きという3つのパラメータで都市の動態を解析するという方法を示している²⁸⁾。

また、高度経済成長期には、大型開発に対応した計画へ参加する。例えば、八郎潟の干拓による農村計画や、富山県射水地区に伴う都市計画、そして最後に、つくば学園都市のような研究学園都市である²⁹⁾。これらは、地区の土地利用計画や人および自動車・都市内交通と通過交通の分離といった交通計画などによって構成される計画であった。

2.3.3 宮脇が高山英華から受けた影響

宮脇は後に住宅地の設計手法として「5つのハードと1つのソフト」³⁰⁾を提唱し、行政と民間の協

量。民間においても造成から、建物、造園、設備にいたるまで関わる全ての業者が協働することが必要であるとしている³¹⁾。これは実際に現場で業者間の意志の疎通がとられていないことを感じた経験から提案されたものであるが、そうした経験のベースとして、高山が都市計画において多分野の協働を実現しようとしていた影響があったのではないかと考えられる。

しかし、その一方で、それまで建築において住民の生活をつぶさに考えて設計するという考え方を持っていたため、高山のように広い範囲から考える都市計画に対して疑問も感じていたようである。

2.3.4 都市計画に対する問題意識

宮脇は静岡駅前商店街再開発や真駒内住宅地計画等の都市計画に関わっていた。これらの計画での提案内容は、交通網計画や道路幅員の指定などの交通処理や土地利用などであった。宮脇はその経験について以下のように述べている³²⁾³³⁾。

僕は実はやったというほどのではありませんが、都市計画をやったんです。(中略)都市計画とは交通網計画に用途地域をぶっ掛ければおしまい、後は色を塗ってパースをかい、最後にレポートを書いちゃうというやつです。あのへんのリアリティの薄さというのは、何か物を作っていく人間にはすごくいやだったんです。

道路計画をやって、用途地区を指定して、色を塗ったら都市計画はおしまいという、全く平面上のことだった。そういうことをいくらやっても、どっかの役所の棚に放り込まれて、おしまい。それが僕は悲しくて、建てる側に回りたいというんで、設計事務所を始めたわけです。

都市計画における生活や空間という「リアリティ」の欠如、都市計画の実現性の低さに対し疑問を持っていたようである。こうした宮脇の考え方にも、吉村の影響を見て取ることが出来る。

2.4 住宅設計における挑戦（ボックスシリーズ）

一級建築士に合格した昭和39（1964）年に、宮脇は宮脇檀建築研究室を設立する。宮脇檀は昭和46（1971）年から昭和59（1984）年にかけて箱形の住宅を設計しており、それは「ボックスシリーズ」と呼ばれている。

宮脇は、全く統一感のない都市に対して、原始的な形と目を引く色彩によりインパクトを与えることを狙っていた。宮脇はボックスシリーズについて以下のように述べている³⁴⁾。

形態が常に単純化されており、拠点としての認識が容易である。都市の中で巨大なスケールのもので高いもの、突飛な形態だけが認識されやすいものとして受け取られがちであり、事実古代から現代に至るまでモニュメントやランドマークを志向する建築はこの方法をとることが多いとはいえ、プライマリィはそのスケールに比較的關係なく認識され易い視覚性を内在している。

さらにそれは、その劣悪な環境から内部を切り離すためという働きもあった。そのことについては以下のように述べている³⁵⁾。

内部に対しては、ボックスが外界から切り離され、断絶した内部空間を獲得しようという姿勢であったのは、外部空間の悪化に対する逃げの姿勢からであった。ひたすらに内にこもり内部に完結した空間を求めている。

さらに宮脇はこのように日本の都市が乱れた要因について、

個人に作らせようという持ち家政策、それをやむなくさせた傾斜生産方式が戦後の日本の家の形、状況を決定的にしました。

と述べて、戦後の復興の際に政府が取った政策に問題があったと指摘している³⁶⁾。

2.5 街並みの「日本らしさ」に対する理解

2.5.1 デザイン・サーベイから学んだこと

(1) デザイン・サーベイに携わるまでの宮脇

宮脇は大学院の時に設計した物件の設計料で日本一周の旅に出る。各都道府県の都市計画課から都市計画の問題点を聞き、レポートにする予定だったが、その道中に見た各地方の集落から日本の集落の美しさがあることを発見した³⁷⁾。

また、宮脇は修士一年の時に残した「飛騨高山の統一的景観について」³⁸⁾という論文のなかで高山の景観形成の要素について分析している。これは、「大学2年の時に見た飛騨高山の美しさに感動したという経験があり、その飛騨高山において統一景観を成立させている要因が何かを明らかにするために行った研究」であった³⁹⁾。市史や地方紙などの文献をもとに日本らしい街並みにおける景観形成の要素について考察している。

宮脇は、学生時代から日本の集落の美しさには気づいており、それがどういった要素から成り立っているのかを検証しようとしていた。

(3) 宮脇ゼミによるデザイン・サーベイ

宮脇は建築事務所を設立したその年に法政大学の講師に就任する。法政大学の講師に就任してから3年目の昭和41(1966)年から8年間で9箇所をわたる集落調査を行った⁴⁰⁾。

対象地は倉敷、馬籠、南古萩町、五個荘、琴平、稗田、室津、丹波篠山、平福であった。対象地選定の条件として

- ① 調査の意欲を高揚させる構造的、又は景観的魅力があること。
- ② 調査し、資料化する学問的意味があるもの。
- ③ 調査に参加する学生にとって教育的効果が期待できること。

といったものが定められていた。

サーベイは、集落の構造と景観を分析するための客観的資料の作成を目的としており、実測図作成についても、次のようなルールが定められていた。

- ・ 集落全体の構造が把握できるよう実測し、全体屋根伏図、全体平面図を1:200で作図する。
- ・ 集落全体の立面図、集落の形態と地形が顕著に現れている部分の断面図を1:50で作図する。
- ・ 集落の典型的な住戸平面図を縮尺1:50で作図する。
- ・ 都市的見地からの資料作成に重点を置くため一般的な建築の表現を基本として建築の構造や空間以外の表現は意図的に避けた。

このようにして、資料の形式をそろえることにより、集落が与える感動を客観的で実証的に解明することが出来るようにしていた⁴¹⁾。

2.5.2 宮脇がデザイン・サーベイで得たもの

宮脇は丹波篠山のサーベイ中に地元住民から住宅設計を依頼された。そこで、街並みの調和の中で住宅を設計する必要が生じた。これが設計において街並みへの調和を考えるようになったきっかけであった⁴²⁾。

実際に、街並みを考慮しつつ建物を作った最初の例は昭和51(1976)年の秋田相互銀行角館支店であった。周囲の美しい土蔵群に合わせて、壁面線や軒、棟等をそろえるという手法を用いている⁴³⁾。

この事例について以下のように述べている⁴⁴⁾。

それまでは、掃きだめに鶴が単体として降りて来るなんて思っていたんですが隣と並べたときにどういう問題が起きるかということを考えはじめたのはその辺からだと思います。

都市や街並みへの関心はそれまでもあったものの、実際の設計において周囲の街並みとどう調和させるのかということを考え始めるようになったのはこれらの事例がきっかけであった。

2.6 小結

宮脇は、大学時代に吉村順三に師事し、生活に密着した「リアリティ」のあるものをつくる意識を持つようになった。さらに、大学院において高山英華に師事し、様々な要素を「総合的に」関連させ、「全体」を作り上げていく考え方を学んだ。さらに、旅行やデザイン・サーベイを通じて日本の集落の美しさを分析し、その要因として「多様性」と「秩序」の存在を発見した。こうした街並みの「日本らしさ」に対する探究心も吉村の影響であったと考えられる。

住宅作品においては、戦後の日本の街並みに対する問題提起として、周囲の街並みから断絶した「ボックスシリーズ」を発表し、松川ボックスで建築学会賞を受賞している。また、丹波篠山や秋田で周囲の街並みと調和した建築に取り組んでいる。これらの住宅作品は、「断絶」と「調和」というように設計手法は正反対であるが、それらの設計手法を取った宮脇の考え方には、「街並みに対する意識」が共通して存在していたと考えられる。この「街並みに対する意識」も、吉村や高山の影響、デザイン・サーベイの経験の中で育まれてきたものであると考えられる。

引用文献

- 1) 別冊新建築：日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀 1980 新建築社 p171-172
- 2) 別冊新建築：日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀 1980 新建築社 p172
- 3) 別冊新建築：日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀 1980 新建築社 p172-173
- 4) 火と水と木の詩（1987年新建築家集団岐阜支部における講演録） 2008 新潮社 p29
- 5) 火と水と木の詩（1987年新建築家集団岐阜支部における講演録） 2008 新潮社 p34-35
- 6) 火と水と木の詩（1987年新建築家集団岐阜支部における講演録） 2008 新潮社 pp45-46
- 7) 別冊新建築：日本現代建築家シリーズ⑦ 吉村順三 1983 新建築社 p189
- 8) 火と水と木の詩（1987年新建築家集団岐阜支部における講演録） 2008 新潮社 p39
- 9) 吉村順三を囲んで 吉村ら 1992 TOTO出版 pp72-76
- 10) 建築雑誌 Vol.114 1999 7月号 p8
- 11) 別冊新建築：日本現代建築家シリーズ⑦ 吉村順三 1983 新建築社 p193
- 12) 吉村順三を囲んで 吉村ら 1992 TOTO出版 p115
- 13) 朝日ジャーナル 1965 11月号 朝日新聞社
- 14) 吉村順三のディテール 吉村順三・宮脇檀 1979 彰国社 pp12-13
- 15) 吉村順三を囲んで 吉村ら 1992 TOTO出版 pp68-77
- 16) 吉村順三を囲んで 吉村ら 1992 TOTO出版 p121
- 17) 吉村順三のディテール 吉村順三・宮脇檀 1979 彰国社 p158
- 18) 私の都市工学 高山英華 1987 東京大学出版会 p174
- 19) 私の都市工学 高山英華 1987 東京大学出版会 p38

- 20) 別冊新建築：日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀 1980 新建築社 pp174-175
- 21) 別冊新建築：日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀 1980 新建築社 p174
- 22) 別冊新建築：日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀 1980 新建築社 pp173-174
- 23) 私の都市工学 高山英華 1987 東京大学出版会 p6
- 24) 私の都市工学 高山英華 1987 東京大学出版会 pp11-16
- 25) 私の都市工学 高山英華 1987 東京大学出版会 pp18-19
- 26) 私の都市工学 高山英華 1987 東京大学出版会 pp41-42
- 27) 私の都市工学 高山英華 1987 東京大学出版会 p18
- 28) 私の都市工学 高山英華 1987 東京大学出版会 pp42-43
- 29) 私の都市工学 高山英華 1987 東京大学出版会 pp49-55
- 30) 都市住宅 1985 年 8 月号 鹿島出版 pp36-60
- 31) 都市住宅 1985 年 8 月号 鹿島出版 p36
- 32) 別冊新建築：日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀 1980 新建築社
- 33) 都市住宅 1985 年 8 月号 鹿島出版会 p26
- 34) 宮脇檀の住宅 ギャラリー間 2000 TOTO 出版 p58
- 35) 宮脇檀の住宅 ギャラリー間 2000 TOTO 出版 pp60-61
- 36) 男と女の家 宮脇檀 1998 新潮社 pp56-63
- 37) 別冊新建築：日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀 1980 新建築社 pp174-175
- 38) CiNii 論文集より 宮脇檀 1960 東大高山研
- 39) 別冊新建築：日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀 1980 新建築社 p175
- 40) 日本の伝統的都市空間 宮脇檀・法政大学宮脇ゼミナール 2003 年 中央公論芸術出版 pp7-8
- 41) 日本の伝統的都市空間 宮脇檀・法政大学宮脇ゼミナール 2003 年 中央公論芸術出版 pp6-7
- 42) 都市住宅 1985 年 8 月号 鹿島出版 p24
- 43) 都市住宅 1985 年 8 月号 鹿島出版 pp24-25
- 44) 都市住宅 1985 年 8 月号 鹿島出版 p25

第3章 住宅地の計画・設計を通して考えたこと

3.1 はじめに

宮脇は、良い住宅地を計画、設計する際に留意すべき点について、「5つのハードと1つのソフト」として、計画設計の段階ごとに示している。「5つのハード」とは、①造成計画、②施設計画、③外構計画、④宅地内計画、⑤建物計画であり、「1つのソフト」とは、①管理計画である。

宮脇が、この考え方を最初に提唱したのは、昭和57（1982）年に開催された講演「町並みづくりについて―高須ニュータウンの場合―」においてであった¹⁾。宮脇は、高度経済成長期が終わり、住宅地は作れば売れる時代が終わり、付加価値をつける必要が高まってきたことを指摘し、田園調布などの良好な環境を持った住宅地を参考事例として、住宅地開発においても良好な環境を作ることができるのではないかと考え²⁾、環境を作るために設計者として作ることのできる要素として「5つのハードと1つのソフト」を挙げている。

一言に環境といっても様々な要素がある。宮脇は住宅地における環境ということについて、住民を対象にした調査結果から、①安全、②教育の場、③自然との融和、④良いコミュニケーションのできる場、という点が重要視されていることを明らかにし、それをもとに環境を作る要素を展開した³⁾。この時点では、それらの要素について具体的な手法は示されておらず、現状の住宅地におけるそれらの要素の問題点を指摘しているにとどまっている。

宮脇は昭和60（1985）年に雑誌『都市住宅』の中で、再び「5つのハードと1つのソフト」について言及している。宮脇は、従来はこれらの要素が様々な業者によって個別に担当されており、総合的に考えられることなく整備されていることが一番の問題点であることを指摘した。その上で、「5つのハード」についてそれまでに設計した事例を示しながら具体的な手法を示している⁴⁾。

また、宮脇の設計した住宅地に特徴的な設計手法として、「コモン」が挙げられるが、コモンについても、宮脇の考えは、住宅地設計の経験を重ねる中で少しずつ変化しており、徐々に設計手法として確立されてきている。

第3章では、こうした宮脇の住宅地計画・設計に関する考え方や技術が形成、確立されていった過程を明らかにすることを目的として、宮脇の携わった表3-1に示す62の住宅地の中から、彼の住宅地計画・設計の考え方や技術がよく読み取れる7つの事業について時系列順に事例分析を行なう。

表3-1 宮脇檀が計画・設計した住宅地

	事業名	事業者	所在地	計画完了年	計画戸数
1	コモンライフおさゆき	積水ハウス	福岡県北九州市	1977	67
2	あざみ野 55	東急不動産	神奈川県横浜市	1979	30
3	柏ピレッジ	東急不動産	千葉県柏市	1980	1400
4	伊集院妙円寺団地	鹿児島県住宅供給公社 住宅生産振興財団	鹿児島県鹿児島市	1980	67
5	竜ヶ崎ニュータウン	住宅・都市整備公団 住宅生産振興財団	茨城県竜ヶ崎市	1981	59
6	コモンライフ則松	積水ハウス	福岡県北九州市	1981	50
7	コモンライフ新宮浜	積水ハウス	福岡県粕屋郡	1982	80
8	高須ボンエルフ	高須土地区画整理組合 住宅生産振興財団	福岡県北九州市	1982	60
9	コモンライフ伊都の里	積水ハウス	福岡県福岡市	1982	60
10	コモンシティ船橋	積水ハウス	千葉県船橋市	1982	11

11	竜ヶ崎ニュータウン	住宅・都市整備公団 住宅生産振興財団	茨城県竜ヶ崎市	1982	44
12	松山上野団地	愛媛県住宅供給公社 住宅生産振興財団	愛媛県松山市	1983	73
13	高松南志度団地	香川県住宅供給公社 住宅生産振興財団	香川県高松市	1983	76
14	イトーピア水城ヶ丘	伊藤忠不動産 住宅生産振興財団	福岡県太宰府市	1983	32
15	イトーピア行橋	伊藤忠不動産 住宅生産振興財団	福岡県行橋市	1983	24
16	平岡ニュータウン	東急不動産	北海道札幌市	1983	68
17	コモンライフ安行	積水ハウス	埼玉県川口市	1984	25
18	高幡鹿島台ガーデン 54	鹿島建設	東京都日野市	1984	54
19	コモンライフ日宇ヶ丘	積水ハウス	長崎県佐世保市	1984	250
20	ホームタウン秋川	住宅・都市整備公団 住宅生産振興財団	東京都秋川市	1984	53
21	桜ヶ丘ハイツ	不二企業 住宅生産振興財団	愛知県可児市	1984	66
22	明野ボンエルフ	大分県住宅供給公社	大分県大分市	1986	39
23	市が尾南	東急不動産	神奈川県横浜市	1986	10
24	つくば二の宮	住宅・都市整備公団 住宅生産振興財団	茨城県つくば市	1987	79
25	相鉄緑園都市	相模鉄道	神奈川県横浜市	1987	2834
26	あすみが丘プレステージ 21	東急不動産	千葉県千葉市	1987	17
27	桜ヶ丘ハイツ	不二企業 住宅生産振興財団	愛知県可児市	1987	27
28	コモンシティー星田 B1	積水ハウス	大阪市交野市	1987	166
29	高須青葉台ニュータウン	若松西部土地区画整理組合 住宅生産振興財団	福岡県北九州市	1988	2400
30	コモア四方津	積水ハウス	山梨県上野原市	1988	1400
31	桜ヶ丘ハイツ	不二企業 住宅生産振興財団	愛知県可児市	1988	42
32	ホームスタウン八王子	殖産住宅	東京都八王子市	1989	606
33	別府スパランド	佐藤組	大分県別府市	1989	465
34	前沢パークタウン	黒部市 第一開発	富山県黒部市	1989	50
35	シーサイドもちもち第一期	積水ハウス	福岡県福岡市	1989	25
36	モンテベルテ萌葱台	宏和興業 住宅生産振興財団	大分県大分市	1989	36
37	桜ヶ丘ハイツ	不二企業 住宅生産振興財団	愛知県可児市	1989	28
38	野田梅郷ニュータウン	住友不動産	千葉県野田市	1989	36
39	佐賀けやき台	旭化成工業 住宅生産振興財団	佐賀県三養基部	1989	35
40	虹が丘	大末建設 住宅生産振興財団	岐阜県可児市	1989	65
41	みずきが丘	東急不動産	千葉県佐倉市	1989	1315
42	グリーンテラス城山	愛知県	愛知県小牧市	1990	100

		住宅生産振興財団			
43	六甲アイランド CITY	積水ハウス	兵庫県神戸市	1990	32
44	つくば松代	住宅・都市整備公団	茨城県つくば市	1990	54
45	青葉台ボンエルフ	若松建設共同企業体 住宅生産振興財団	福岡県北九州市	1990	106
46	中部平成台	中部開発 住宅生産振興財団	三重県松阪市	1991	935
47	諏訪野	福島県住宅生活協同組合 住宅生産振興財団	福島県伊達市	1991	304
48	ホームスタウン松ヶ台	殖産住宅	福岡県遠賀郡	1991	900
49	季美の森	東急不動産	千葉県山武市	1992	2650
50	グリーンタウン丸尾台	宇部不動産 宇部ハウス	山口県宇部市	1992	71
51	多井畑ニュータウン	東急不動産 三菱地所	兵庫県神戸市	1992	327
52	百合丘ニュータウン	茨城県住宅供給公社	茨城県水戸市	1992	22
53	旭グリーンヒルズ	ハザマ環境開発 住宅生産振興財団	高知県高知市	1993	364
54	桜ヶ丘ハイツ桂ヶ丘	不二企業	愛知県可児市	1994	14
55	サンリータウンえびつ	銭高組 住宅生産振興財団	福岡県遠賀郡	1994	508
56	グリーンヒルズ季の郷	ジェイブル 住宅生産振興財団	福島県須賀川市	1995	504
57	大津美咲野	九州旅客鉄道 住宅生産振興財団	熊本県菊池郡	1996	1200
58	広陵台	福岡県住宅供給公社 住宅生産振興財団	福岡県宗像市	1996	25
59	グリーンポート愛島	グリーンポート 住宅生産振興財団	宮城県名取市	1996	2070
60	玉野台	住宅生産振興財団	愛知県春日井市	1997	570
61	フォレストエージ高幡鹿島台	鹿島建設	東京都日野市	1997	53
62	オレンジタウン	四鉄不動産 住宅生産振興財団	香川県大川郡	1997	682

3.2 事例分析

3.2.1 コモンライフおさゆき

(1) 事業概要

- ・所在地：福岡県北九州市
- ・計画・設計完了年：1977 年
- ・造成竣工年：1982 年
- ・計画戸数：67 戸
- ・事業主：積水ハウス

(2) 計画内容と特徴

高度経済成長も終わり、住宅についても量から質へという意識の転換がなされるようになった。そのような時期にあって開発業者も環境を売り物にした住宅地の開発をすることが求められるようになった。このプロジェクトでは開発業者である積水ハウスが計画したものにアドバイスを施す程度のものであった。

宮脇は、住宅地設計にかかわった初期のことを振り返って、以下のように述べている⁵⁾。

まず初めに、戸建て集合という概念があるかどうかということを、学会の図書館に二日ばかりうちのスタッフを通わせて、全学会論文を調べさせたのですが、皆無であった。何もなかった。

当時は戸建て住宅地の設計に関する考え方や手法は確立されていなかった。その中で宮脇は模索しながら住宅地の設計を進めていった。宮脇は、この事業に関わっていたときのアプローチの仕方について以下のように述べている⁶⁾。

今われわれが戸建て住宅地でやってる手法の大部分はそこでもう彼らがやってたんです二重の生垣にして玄関前にシンボルツリー立てて、その木を連続させることによって並木を作るとか、交差点は特殊な扱いをすとか、そこまではやってたんです。それをみながら欠けてるものは何かというんで、そこでちょっとコンサルタントをしてそれまで彼らがやった手法を修正したのがのめり込みの始まりですね。

住宅地の計画や宅地造成等が決定した状態でプロジェクトに関与した宮脇は、パスによるスタディによりこの生垣の緑を連続させることが統一感のある街並みをつくるために必要だと考え、外構の統一と門塀の後退といった部分的な工夫を取り入れた⁷⁾。

では、「外構の統一」に宮脇が着目したのは、どのような考えに基づいたものであったのだろうか。当時の住宅地は官民の境界がはっきりしすぎて、道路と宅地が分断されてしまう状況があった。このような状況により、それぞれの宅地がバラバラな、専有意識の強い戸建て住宅地が形成されていた⁸⁾。それが街並みの混乱をきたしているという考え方から、官民双方が街並みの形成に寄与するようになかたちとしてその中間領域が注目されるようになった。そのようなアプローチの中で、官民の中間領域の手始めとしての「外構の統一」であったのだろう。

外構は民地の中にあり、それぞれの住民が作る要素であるが、それは同時に公共の空間である道路にも面している。宮脇は、外構を統一することにより、街並みに一体感を持たせようと考えたのである。このようにして、当時としては特徴的な統一した外構、門塀の後退といった手法は取り入れられていた。

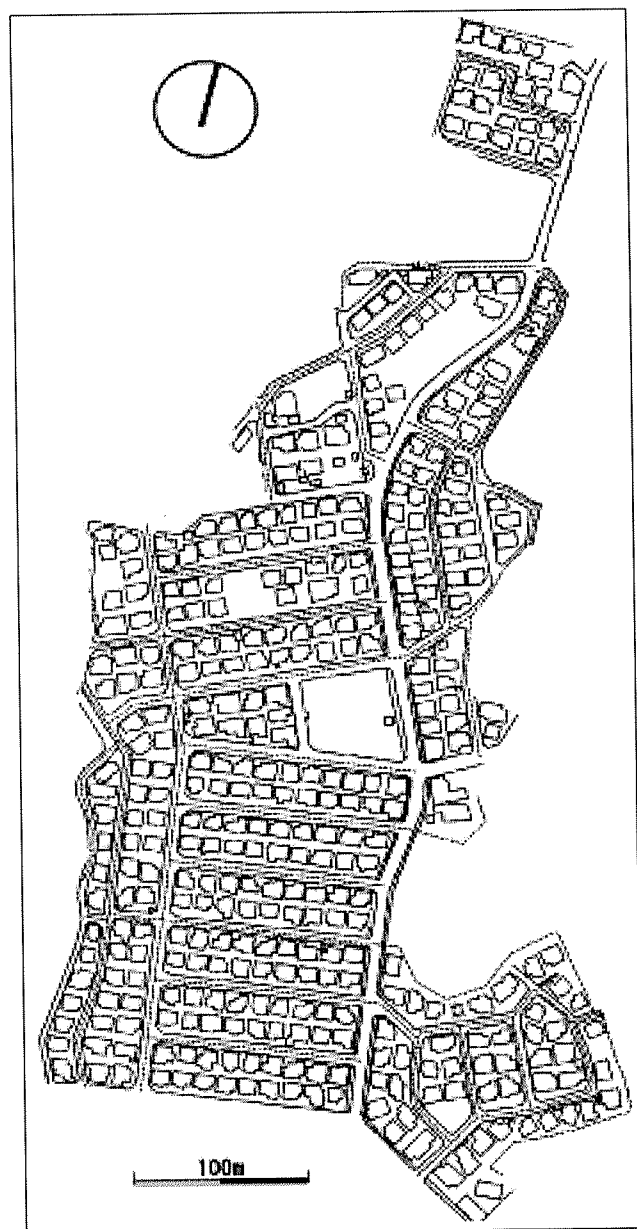


図 3-1 コモンライフおさゆき全体平面図

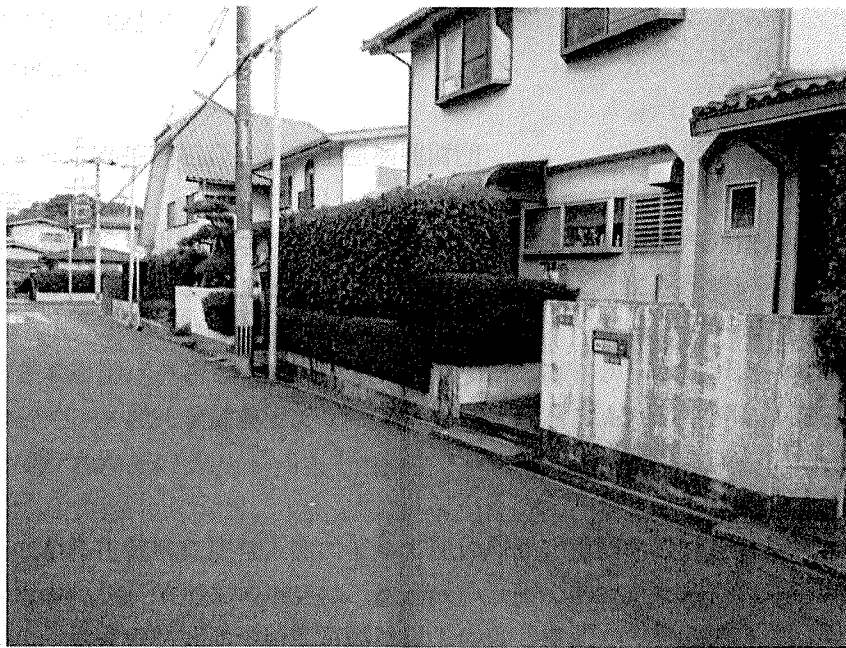


写真 3-1 コモンライフおさゆき・外構と二重生け垣を撮影

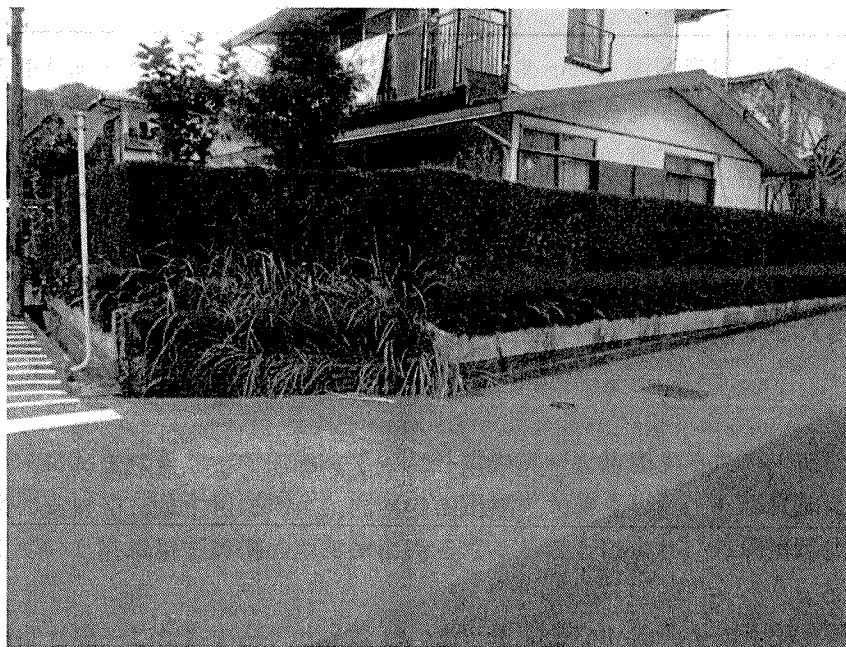


写真 3-2 コモンライフおさゆき・街区角の緑化スペースを撮影

3.2.2 高須ボンエルフ

(1) 事業概要

- ・所在地：福岡県北九州市
- ・計画・設計完了年：1982 年
- ・造成竣工年：1982 年
- ・計画戸数：60 戸
- ・事業主：高須土地地区画整理組合、住宅生産振興財団

(2) 計画内容と特徴

この計画では宮脇が初めてボンエルフ道路を導入した。宮脇は住宅地内の道路が人間の生活空間であるという考えを持っていた。このことについて宮脇は以下のように述べている⁹⁾。

アメリカや、日本における私たちのソシオメトリックの調査が示すように（＜郊外住宅地における人間と環境の研究＞法政大学宮脇ゼミナール，1972）地域における住民のコミュニケーションの70%近くが路上で行われている。

このような考え方から住宅地に住む人間にとって使いやすい道路の設計を目指すようになった。道路への理想はあったのだが高須ボンエルフは二次造成の計画であったため、外周道路には手を加えることはできなかった。当時の状況について宮脇は以下のように述べている¹⁰⁾。

六十坪から六十五坪の大きさに切ろうと思うには余りにも道路のピッチが大き過ぎました。一次造成が完全に出来上がっている宅地をいただいて、二次造成だけでこれ进行处理しなければならなかった。

上記のような条件があったため、設計には多くの制約があった。街区形状が決まった段階で良好な宅地と生活空間を創出するために、対象街区内にボンエルフ道路とコモン広場を作ることで宅地の造成をすることと、生活空間としての道路の設計を同時に解決した。宮脇は、コモンの導入について、以下のように述べている¹¹⁾。

全部 60 坪で切って行ったら中央に空間ができてしまった。それを宅地として売するためには変形地や旗竿宅地にするとか、道路一本新たに作らなくてはならない。苦肉の策でそれをコモンにしてしまおうということでできたものです。

また、コモンライフおさゆきなどでも考えていた外構の統一を徹底するため、更なる工夫がなされた。統一した外構の素材や二重生垣に加え、門扉の後退幅を大きくした。それに加え、生垣の緑を切断する要因と考えていた駐車場を裏側のコモンに持つてくることにより、外周道路側からの連続性を向上させた。

また、門扉、門灯も統一したものをデザインし、まとまりのない風景を作り出す要素を減らしている。このようにして外構の統一への意識はさらに強く示されている。宮脇は外構の統一に関して工夫した点を以下のように述べている¹²⁾。

高須のボンエルフの特徴というのは、とにかく外周道路に一切車庫を造るのをやめようということから始まりました。ここで今回は一挙に車庫もやめてしまうということによってご覧のように外出部に生垣の長い列ができました。これをするためにまず家の裏に車を回そう。車をまわした分

をボンエルフ化しようというのが今回のやり方であります。

上の言葉に現れているように、駐車場は裏に回し、外周道路側では統一感を出すための設計になっている。そして、裏に回した駐車場が物置のようになり、乱れた風景とならないように設計がなされた。宮脇は、その点については以下のように述べている¹³⁾。

1台あたり2.5×5mという広さは、車が出てしまったあとは貴重な共有空間になり得る。それがランコーン型ボンエルフ広場（5～8戸の中央に生活空間としての共同駐車場を作る手法）で、緑地を十分に取り、子供の遊び場も確保し、舗装材を工夫して駐車場色を払拭するという形で＜高須ニュータウン＞で成功して以来、さまざまなかたちのヴァリエーションをつくってみた。

宮脇は、一般的な住宅地における児童公園については問題点があるとしており、そのことを以下のような理由を含めて指摘している¹⁴⁾。

幼児たちは母親たちの目が届く玄関前の歩道などで遊ぶのが自然であり、その意味で何十戸にひとつの児童公園が数百メートル離れたところにあるなどというのは幼児用としてはあまり意味がない。

それに対する解決策として、小さな広場を家の近くに用意することを提案していた。この小さな広場の一部として駐車場を活用するという手法を使っている。さらに、コモン広場にある駐車場から家にアクセスできるように勝手口に繋がる裏口や、コモン広場どうしを繋ぐ緑道も作られている。

これらのことから、コモン広場は、外周の外構を統一するために駐車場を裏に回す際に処理が必要となった裏の空間につくられ、その上で住民の利用を考えた工夫がなされた。街並みという住宅地全体のことを考えた外構の統一と、住民の生活を考えた駐車場やコモン広場などの設計の両立が図られている。

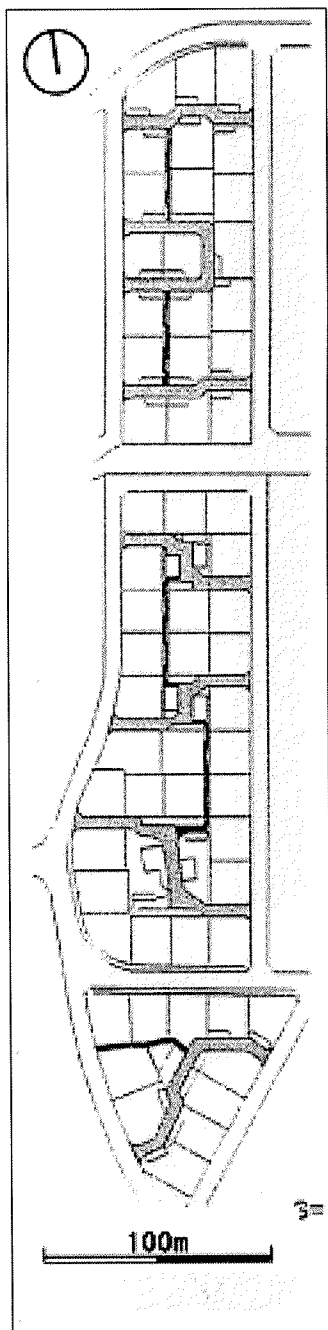


図 3-2 高須ボンエルフ全体平面図

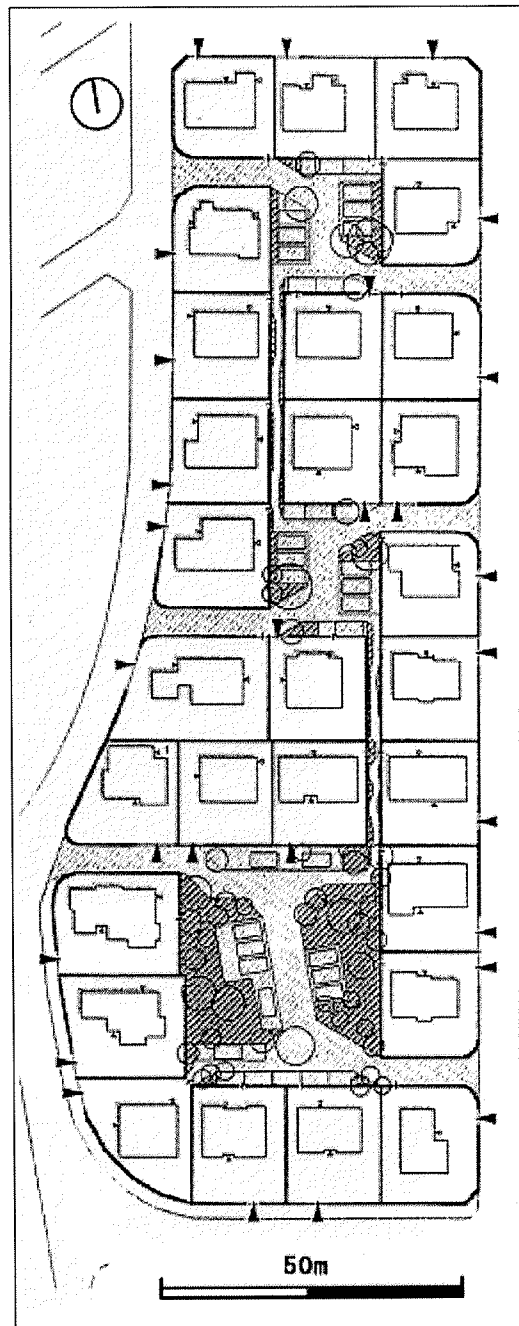


図 3-3 高須ボンエルフ詳細

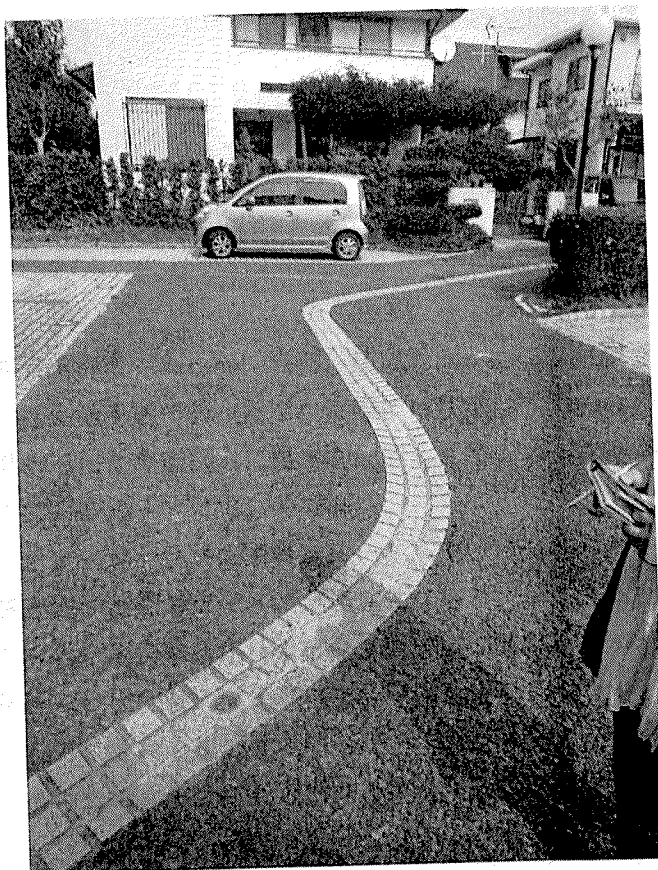


写真 3-3 高須ボンエルフ・コモンを撮影
(中央排水溝により強調されたボンエルフ)



写真 3-4 高須ボンエルフ・外周道路よりボンエルフ道路入り口を撮影
(統一された外構とイメージハンプにより強調されたボンエルフ道路)

3.2.3 高幡鹿島台ガーデン 54

(1) 事業概要

- ・所在地：東京都日野市
- ・計画・設計完了年：1984 年
- ・造成竣工：1984 年
- ・計画戸数：54 戸
- ・事業主：鹿島建設

(2) 計画内容とその特徴

鹿島建設の社宅跡地の再開発事業であった。当初、造成計画から 54 戸全ての住宅設計まで宮脇が関わり、一貫した街づくりを行える予定であったが、実際には住宅は 5 戸のみの設計となった¹⁵⁾。

設計自由度の高い事例であったため道路内に樹木を配置してボンエルフ道路にするなど、一般の住宅地では困難な設計がなされている。

また、住宅地内の外構とイメージハンプの素材を統一し、カーポートのゲートを同一のデザインにして住宅地全体として統一感を出すためのデザインが厳密になされている。また、道路については擬似歩道を設けたり、道路内への樹木の配置をしたりするなど住宅地の道路全体がボンエルフ道路としてデザインされている。加えて街区には宅地の間を通り道路と道路を結ぶフットパスも設計されている。

デザインにより統一感のある街並みを形成するその一方で、このような人工的なデザインは単調さとなってしまう恐れもある。そのため宮脇は住宅地内での多様な景観を楽しむための工夫を以下のように述べている¹⁶⁾¹⁷⁾。

交通量を絞り、車が人に遠慮するという考えに基づいた。道は歩行者の目に映る景色が単調にならなぬよう、ゆるい曲線を描く。

道路幅員 5 m、有効幅員 3 m、道の豊かさは人中心に考えた場合、幅員によるものではないということを実践した。道路面には横断するタイル、水径としてのタイル、歩専道の入り口を知らせるレンガがアスファルトとパターンをつくる。

歩行者の目に映る景色を想定するなど、道を歩行者が主役となるようにデザインをしていることが分かる。道路は車が主役ではなく歩行者のための空間で、住民の生活空間であるという宮脇の考え方があらわれている。

この事例は、住宅の設計以外の点に関しては、当時宮脇が理想としていたことが実現できた事例であったことが以下の宮脇の言葉から分かる¹⁸⁾。

よいと思うこと、理想的なこと（完全なるボンエルフ、擬似歩道、幅員 4 m、有効 3 m の真ん中に木の生えている道、公園課が引き取ってくれない公園、道路課が引き取ってくれないポケット広場と道路植栽 etc.）思いつく限り全部やっしまえと出した案を全部許可してくれた。

しかし、この事例では後の事例に見られるような住宅に取り囲まれる様に配置されたコモンは導入されておらず、住宅の間に広場のような空間が 3 箇所設けられるにとどまっている。その要因としては、生活者の共有の広場を大きく持つことよりも、管理の移管しやすさを優先させていたと考えられる。こ

の点について宮脇は以下のように述べている¹⁹⁾。

公園でもないのに広場がある。公園課では引き取ってくれないけど、〈ふれあい広場〉という名前をつけて、生活課というところで管理してもらうようにした広場とか、およそそれまでは考えられないようなことが全部通っちゃって。

自由なデザインのできたこの事例で、全道路をボンエルフにし、擬似歩道を設けたことにより、宮脇はこの時点では歩行者の生活空間となるような道路を中心にした街づくりを理想にしていたことが読み取れる。また、道路の舗装や外構のデザインによって街を構成する要素を減らすことによって統一した街並みをつくることも求めていたのであろう。

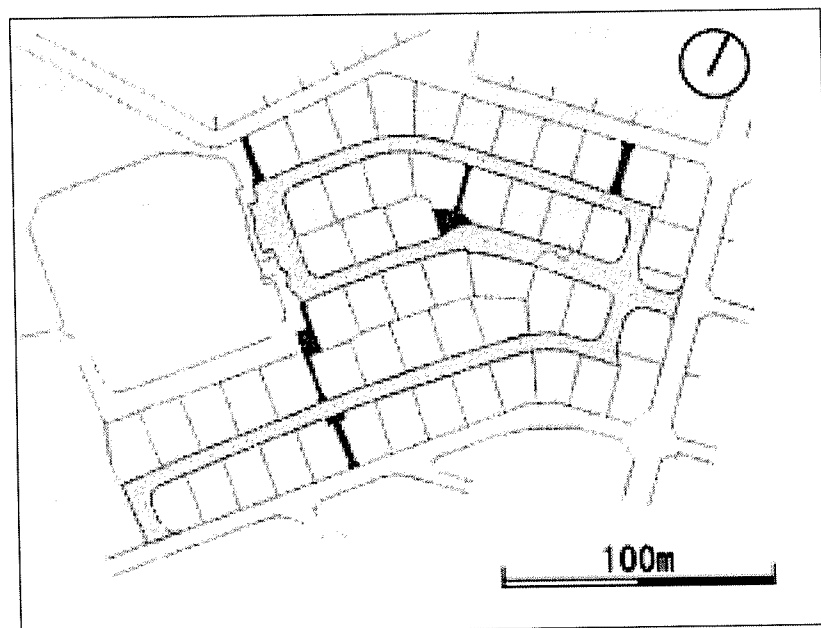


図 3-4 高幡鹿島台ガーデン 54 全体平面図

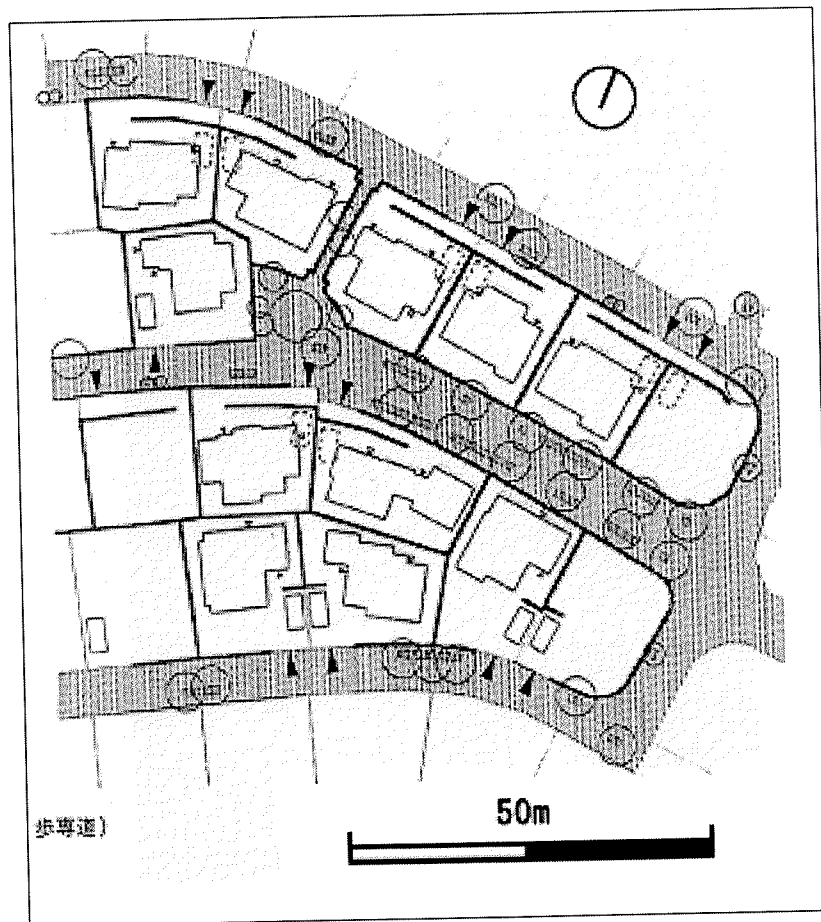


図 3-5 高幡鹿島台ガーデン 54 詳細平面図

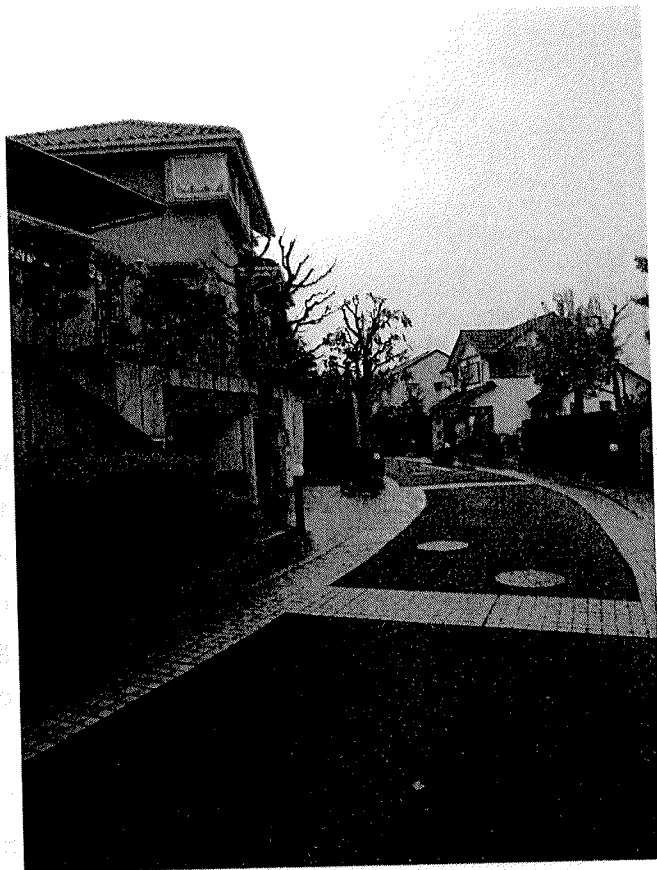


写真 3-5 高幡鹿島台ガーデン 54・住宅地内ボンエルフ道路を撮影
(道路内のレンガ舗装により擬似歩道が視覚的に意識される)



図 3-6 ガーデン 54・住宅の門塀周辺を撮影
(宅地内と同一の舗装により官民境界が意識させない設計)

3.2.4. 明野ボンエルフ

(1) 事業概要

- ・所在地：大分県大分市
- ・計画・設計完了年：1986 年
- ・造成竣工年：1986 年
- ・計画戸数：39 戸
- ・事業主：大分県住宅供給公社

(2) 計画内容と特徴

昭和 40 年代から開発が進んでいた団地の最終区間である明野団地第 5 工区の一部であった。そして、特にこの対象の敷地は大分県住宅供給公社の 20 周年を記念して、新しい時代の住宅地の方向性を示すものが求められた計画であった²⁰⁾。

この事例では、造成前の地形を尊重して、できるだけ土の移動量を少なくするために、斜面造成がなされている。宅地造成に関して宮脇は土地の持っている地形を尊重することが必要だと考えていた。その点について宮脇は以下のように述べている²¹⁾。

地形を変更することが、その地が持ち続けてきた歴史を断ち切り、生態系を狂わせたりすることに関しての、畏れの感情は露ほども見られない。

その土地が持っている地形的・自然的特性に関して、それらを可能な限り残すのは計画者の礼儀である。

さらに、地形の改変をできるだけ少なくした結果発生する住宅周りの法面を斜面緑地とすることで、官民境界を曖昧にしながら、視覚的に一体となるように設計している²²⁾。

そして、対象の敷地は、南東に向かって傾斜しており、その南東には高尾山（旧丸尾山公園）があったため斜面緑地に沿って道が設計され、遠くの美しい山並みを眺めることができるようになっている¹⁹⁾。道路は生活空間であるということと同時に、住宅地内の道路を移動した際のシークエンスの変化をもたせて、様々な風景を楽しませる住宅地を作ろうという考えが読み取れる。統一することに加えて、その住宅地内から見ることでできる風景に多様性を持たせることを狙っていたと考えられる。宮脇は、住宅地そのものには統一感を持たせる一方で、住宅地内から見ることでできる風景には多様性をもたせることによって、日本の集落の有り方から学んだ、統一感と多様性の両立を図っていると考えられる。

高須ボンエルフで初めてコモンを取り入れてから明野ボンエルフまで、宮脇はボンエルフを取り入れた住宅地は多数設計してきた。明野ボンエルフより以前はいずれも、街区内に作ったコモン内にボンエルフをつくっていた。

しかし、この明野ボンエルフでは、コモン内だけでなくコモン間を繋ぐ道路も舗装の切り替えやボンエルフとして設計している。また、3～7 軒の住宅により囲まれたコモンをボンエルフ道路でつなぎ住宅地全体が構成されている。このような葡萄の房のようにコモンが形成されているものを、ここでは「クラスター型コモン」と呼ぶ。この事例は、コモンをボンエルフ道路により繋いでクラスター型のコモンをつくった初めての住宅地である。

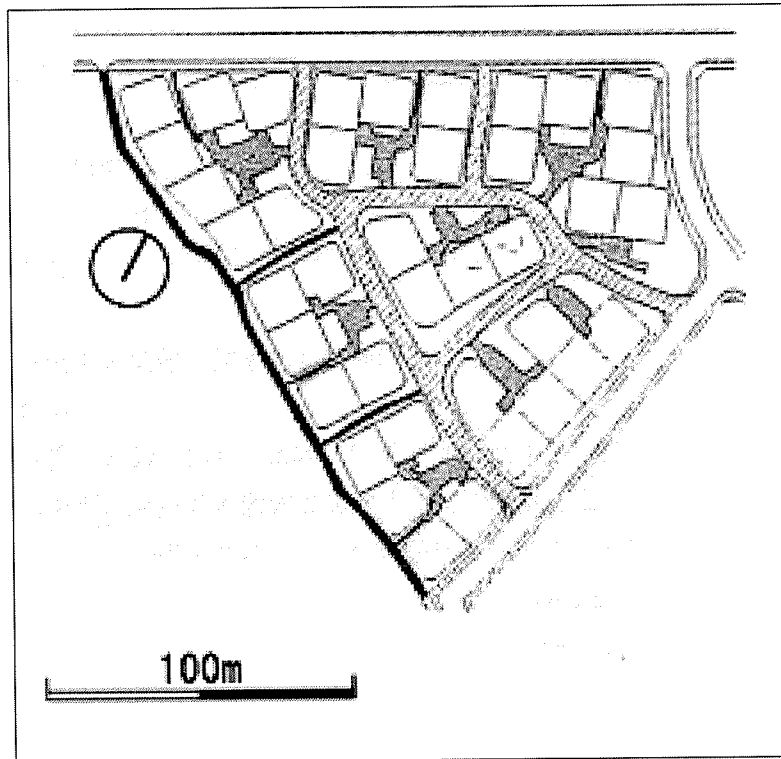


図 3-6 明野ボンエルフ全体平面図

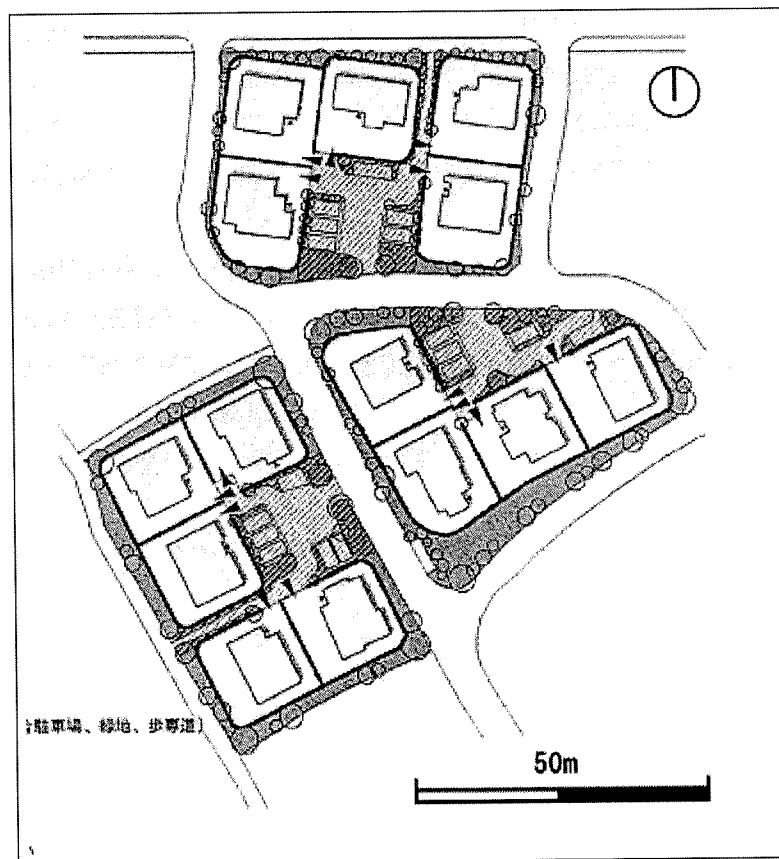


図 3-7 明野ボンエルフ詳細平面図

1.2.5 青葉台ボンエルフ

(1) 事業概要

- ・所在地：福岡県北九州市
- ・計画・設計完了年：1990 年
- ・造成竣工年：1992 年
- ・計画戸数：106 戸
- ・事業主：若松建設協働企業体，住宅生産振興財団

(2) 計画内容とその特徴

区画整理の保留地分譲の計画であり，道路，宅地造成に関する設計も行った．高須ボンエルフの担当者も参画しており，高須ボンエルフの問題点を踏まえての設計となった²³⁾．

この事例も，明野ボンエルフのように，5～10 軒程度の住宅により取り囲まれたコモンが緩やかにカーブした道路によって結ばれる「クラスター型コモン」により構成されている．全部で 13 のコモンが設けられているが，コモンごとにそれぞれコモンツリーが決められており，コモンに名前がついている．コモンの入口にはゲートとなる木とコモンの名前の刻まれたプレートが設置され，よりコモン 1 つ 1 つのまとまりを作り出そうとしていることが読み取れる．

また，高須ボンエルフでの問題点を踏まえて，アプローチをコモン側に持ってくるなど，コモンを住宅地設計の主要な要素として積極的に使おうとする姿勢が読み取れる．さらに，一家に一台以上の駐車場を用意することが必要になってきた状況や，日本人の持つ占有意識に対応して駐車場は宅地内の住宅に近い場所に設計されている²³⁾．その上で，宅地内に設けられた駐車スペースの舗装はコモンとそろえることにより，車の止まっていない時間はコモンになじむようになされている．加えて，建築の屋向きもコモンに向くように配置され，これまでの住宅地よりもコモンを囲む意識が高くなっていると考えられる．

住宅地内の道路は，街区内をループ状に走る 1 本の集散道路以外は全てボンエルフ道路となっており，ボンエルフ道路はコモンの舗装と同一になっている．コモン入口に設けられたゲートとなる木やボンエルフ道路とコモンの統一された舗装により住宅地全体が歩行者にとって豊かな空間となっている．

なお，集散道路も基本はアスファルト舗装であるが，コモンの入口部分には舗装の切り替えがなされており，通行する車両への注意を促す設計がなされている．

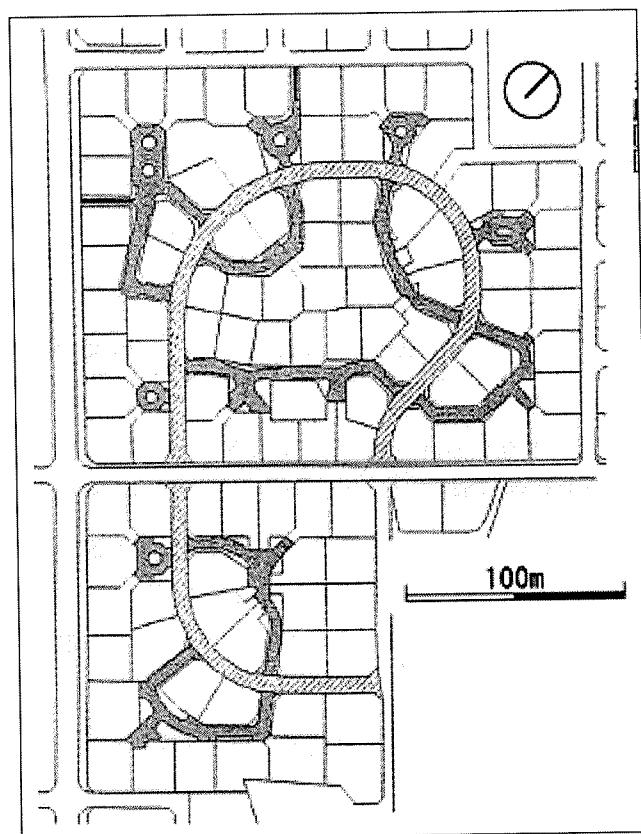


図 3-8 青葉台ボンエルフ

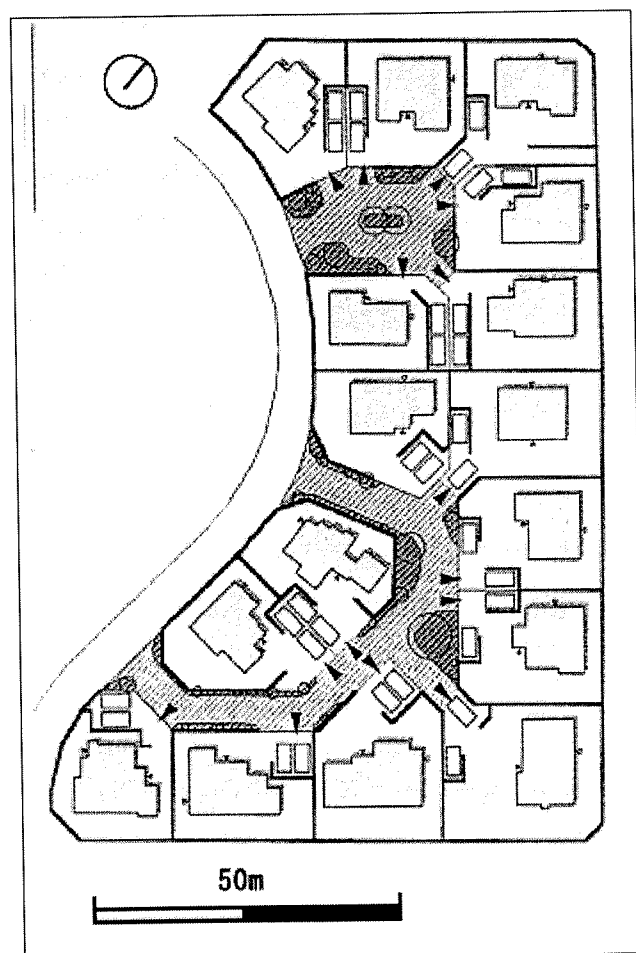


図 3-9 青葉台ボンエルフ詳細平面図

1.2.6 諏訪野

(1) 事業概要

- ・所在地：福島県伊達郡伊達町
- ・計画・設計完了年：1991 年
- ・造成竣工年：1995 年
- ・計画戸数：304 戸
- ・事業主：福島県住宅生活協同組合，住宅生産振興財団

(2) 計画内容とその特徴

コモンを導入した住宅地として，最大規模の宅地開発である．事業主である福島県住宅生協の理事長が“豊かに暮らせる街をつくりたい”という意欲が強く，全国の住宅地を視察研究した結果，“コモン型の宅地開発を行いたい”と宮脇を訪ねてきたことから始まった²⁴⁾．

当時，環境を保持しつつ共生的な環境づくりが提唱されており，建設省の「環境共生住宅市街地モデル事業」の指定を受けた住宅地としての設計がなされ，雨水の浸透枳や太陽光発電による街路灯や照明が設置された²⁵⁾．

宮脇は住宅地の造成に関してその土地の持っている特色を生かすことが必要だと考えていたが，ここでもその考えが現れている．計画対象地は果樹栽培でよく知られる農村風景の中にあつたため，宮脇はその風景を生かすことを考えていた．宮脇はその設計意図について以下のように述べている²⁵⁾．

多数の桃や梅のあの豊かさを残したいとも思った．計画地内の緑化を十分にし，公園に多くの果樹を移植したり，コモンというかたちで広場と緑の場を作ったのもその意図の一部である．

宮脇の持っている住宅地内の道路に関する考え方は一貫していて，ここでも道路は歩行者のための空間となるように設計されている．この住宅地は，地区内幹線道路から入り，細街路，コモンへ繋がるボンエルフ道路で構成されている．そのことにより，通過交通を減らし，住宅道を歩行者のための空間とすることができるようになっている．このことについて宮脇は以下のように述べている²⁶⁾．

各道路は 外周道路からコモンに至るにしたがって，より通行量，速度が下がり，歩行者にとってより魅力的な外部環境になるように設計している．

こういった道路の構造だけでなく，コモン入口のフォルトを設置することや，コモン入口にゲート性を持たせた植樹をすることにより，車両の速度を下げさせるような設計もなされている．

また，住宅地設計当初から行っている要素を統一することによるまとまった街並みづくりも行っている．宮脇は，そのことについても以下のように述べている²⁷⁾．

宅地周辺の生垣，集合メーターや門灯を内蔵した門柱，門扉等が混乱のない統一的な美しさを生み出している．カーポート屋根も型指定で統一性を保ったり，物置の位置等も指定する．

しかし，宮脇は統一するだけでなく，街並みの構成要素が多様性を持っていることも必要だと考えるようになっていた．街並みの統一感と多様性について宮脇は以下のように語っている²⁸⁾．

屋根と塀、外構の部分は揃えて、門塀や門柱、表札であるとか、家の形や外壁などは、できる限りフリーにしようと提唱しています。

また、住宅自体については、建築コードを設けることによりある程度の規制は施すものの、自由さを発揮できるような内容にしたと語っている²⁷⁾。

さらに住宅地全体にわたりコモンを取り入れ、コモン内の安全性を確保するための道路設計などがなされている。ここで宮脇はコモンの持つ効用として以下のような点を示している²⁶⁾。

- (1) 広場は、共有地として将来とも良質なオープンスペースが確保される。
- (2) 広場は、通過交通のない静かで落ち着いた緑地として、日照、通風、景観などの住宅の居住環境を高める。
- (3) 広場は、子供の遊び場（特に母親の目のとどく家の近くでしか遊べない幼児のための）として最適であり、また向こう3軒両隣のコミュニティの舞台となる。
- (4) 広場には、1軒の家ではもてないものが共有物として計画配置できる（ゲストカーポート、子供の遊び場、ベンチ、お花見スペース、クリスマスツリー、景観高木、防犯灯等）。
- (5) 各広場をネットワークして、歩行者ルートを計画地内に作り出すことができ、散歩や、近くへの買い物、公園などへ施設利用を活性化することができる。

コモンを初めて取り入れた高須ボンエルフでは、旗竿宅地の発生に対する解決策といった役割が主なものであったが、諏訪野までの取り組みの中でコモンの持つ役割が変わってきていることがうかがえる。



図 3-6 諏訪野全体平面図

1.2.7 フォレストエージ高幡鹿島台

(1) 事業概要

- ・所在地：東京都日野市
- ・計画・設計完了年：1997 年
- ・造成竣工年：1997 年
- ・計画戸数：53 戸
- ・事業主：鹿島建設

(2) 計画内容とその特徴

ガーデン 54 の隣の地区で、ガーデン 54 と同様、鹿島建設の社宅地を住宅地開発したものである。開発業者も、設計者もガーデン 54 と同様であり、ガーデン 54 との関係性についてはよく考慮する必要があった²⁹⁾。

隣のガーデン 54 の人工的なデザインに対し、自然な印象を与えるような設計になっており、舗装を自然石としたり、道路に曲線が用いられている。この点について宮脇は以下のように述べている³⁰⁾。

外周からの入り口やコモンの出入り口部分には自然石でイメージハンプを作り、自然石の V 字型側溝や擬似歩道等で歩行者優先のみちづくりをしている。

また、街区の入口に集合駐車場を集中させている。その他の駐車スペースは各住宅の宅地内に入っている。住宅地内の土地は入口部分の集合駐車場以外は市に移管している。市に移管するためには様々な工夫が必要だったと当時の設計に関わった平山氏は以下のように語っている³¹⁾。

石の舗装をしたいんだけどとなったら、ストックをね用意しますと、補修のためのね、それを先に収めちゃうとかね。

この事例でもコモンを取り入れている。ここでは中央を通る集散道路からクラスター型コモンを設計し、コモンは 7～9 軒の住宅で取り囲むような形になっている。コモン同士をつなぐ道路も、これまでの歩専道だけでなく、ボンエルフ道路となっており車も通行できるようになっている。このコモンとコモンを繋ぐ道路について当時宮脇檀建築研究室のアーバンセクションで担当者であった平山氏は以下のように語っている^{32) 33)}。

コモン広場を繋ぐ区画道路はそれぞれのコモンを繋ぐ路地的な位置づけで、コモンが行き止まりの袋路として閉塞間がないようにすると同時に、電力等の供給ルートやサービス用の通路として計画している。

ひとつのコミュニティを形成しているコモンは、ボンエルフ道路や歩行者専用道路によって相互に結ばれて、歩行者が快適に歩けるようなネットワークを形成している。ここに住む住民だけでなく、周辺の住民に対しても、公園やバスの利用のためのネットワークとしてひらかれている。

つまり、ひとつのコモンにおけるコミュニティだけではなく、コモンとコモンの間のコミュニティも

構築するような設計となっていたと考えられる。

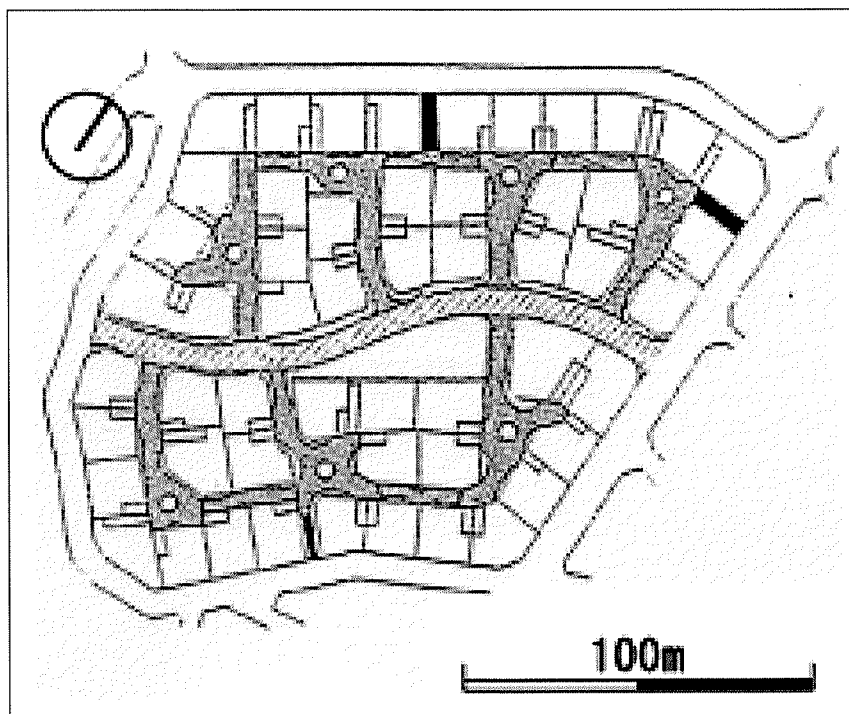


図 3-7 フォレストステージ高幡鹿島台全体平面図

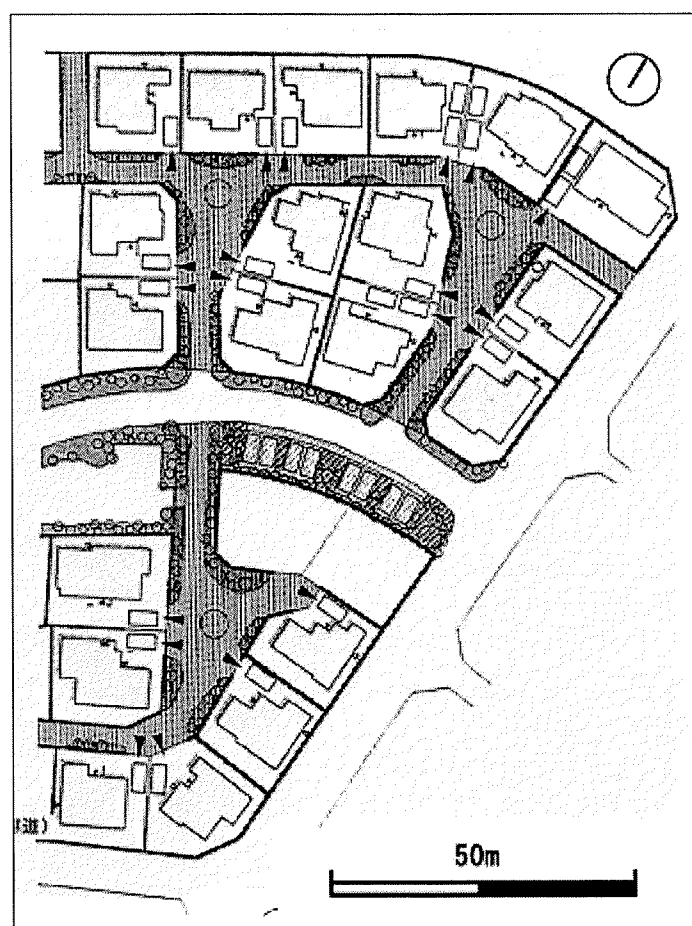


図 3-8 フォレストステージ高幡鹿島台詳細平面図



写真 3-7 フォレステージ高幡鹿島台・コモンとコモンツリーを撮影
(自然石舗装, 3方向からアプローチ可能なコモン)

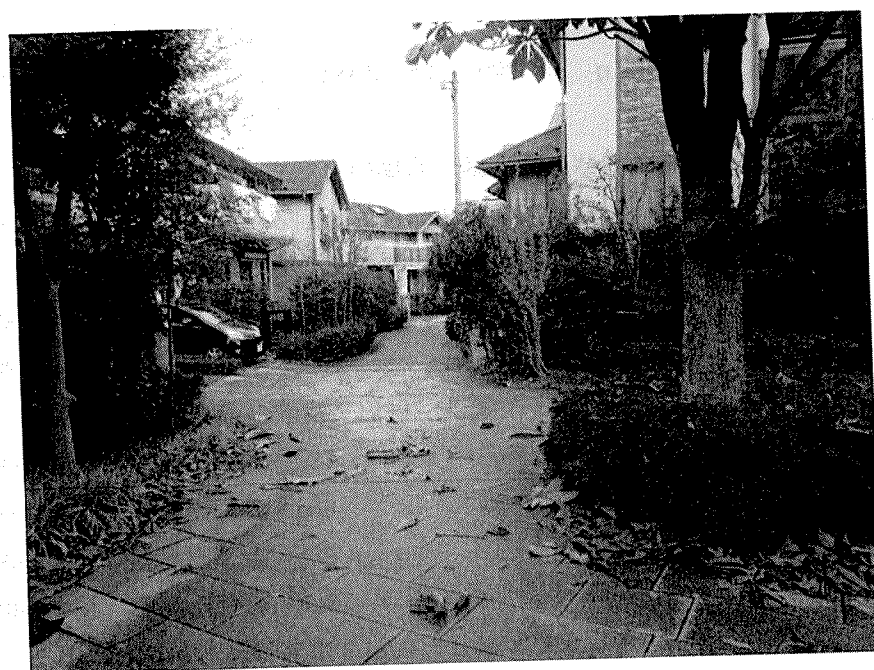


写真 3-8 フォレステージ高幡鹿島台・コモンと街区道路
(街区道路も自動車通行可, 各コモン間のつながりが意識されている)

3.3 小結

宮脇が最初に携わった住宅地「コモンライフおさゆき」では、統一した街並みをつくるために外交を統一し、門塀を後退させている。さらに、道路も人間のための生活空間であるとして、ボンエルフ道路を設計し歩行者と自動車の共存を図った。

「高須ボンエルフ」では、不整形な宅地条件から苦肉の策としてコモンを取り入れた。しかし、後にそのコモンがコミュニティの形成に貢献していることに気づき、その後コモンを積極的に取り入れるようになった。やがてコモンという設計手法は、住宅地全体の平面計画、各住宅の配置等の住宅地を形成する他の要素と有機的な関係を持つものへと洗練され、「クラスター型コモン」へと発展した。それに加え、宮脇は、各事例において維持管理や建替えに関して規定した管理計画を策定した。

引用文献

- 1) 街並みづくりについて—高須ニュータウンの場合 宮脇檀 家とまちなみ No. 10 1982 年 7 月 住宅生産振興財団 pp9-20
- 2) 街並みづくりについて—高須ニュータウンの場合 宮脇檀 家とまちなみ No. 10 1982 年 7 月 住宅生産振興財団 p10
- 3) 街並みづくりについて—高須ニュータウンの場合 宮脇檀 家とまちなみ No. 10 1982 年 7 月 住宅生産振興財団 pp10-11
- 4) 都市住宅 1985 8 月 鹿島出版会 pp36-60
- 5) 街並みづくりの現状と問題点 宮脇檀 家とまちなみ No. 12 1983. 1 pp7-8
- 6) 都市住宅 1985 8 月 p25
- 7) 都市住宅 1985 8 月 p47
- 8) コモンのあるまち 平山郁朗 家とまちなみ No. 40 1999. 9 p 55
- 9) 都市住宅 1985 8 月 p37
- 10) 街並みづくりについて—高須ニュータウンの場合 家とまちなみ No. 10 1982 7 月 p11
- 11) 住宅が集合する時 まちなみ大学第 5 回 まちなみ大学講義録 1 1996 p76
- 12) 街並みづくりについて—高須ニュータウンの場合 家とまちなみ No. 10 1982 7 月 p13
- 13) 都市住宅 1985 8 月 p39
- 14) 都市住宅 1985 8 月 p44
- 15) コモンで街をつくる 宮脇檀建築研究室 1999 丸善プラネット p82
- 16) 都市住宅 1985 8 月 鹿島出版会 p37
- 17) 都市住宅 1985 8 月 鹿島出版会 p38
- 18) 都市住宅 1985 8 月 鹿島出版会 p35
- 19) 都市住宅 1985 8 月 鹿島出版会 p27
- 20) コモンで街をつくる 宮脇檀建築研究室 1999 丸善プラネット p94
- 21) 都市住宅 1985 8 月 p40
- 22) コモンで街をつくる 宮脇檀建築研究室 1999 丸善プラネット p168
- 23) コモンで街をつくる 宮脇檀建築研究室 1999 丸善プラネット p168
- 24) コモンで街をつくる 宮脇檀建築研究所 1999 丸善プラネット p180

- 25) 諏訪野の街づくり 家とまちなみ No. 33 1996 3月 住宅生産振興財団 p31
- 26) 諏訪野の街づくり 家とまちなみ No. 33 1996 3月 住宅生産振興財団 p35
- 27) 諏訪野の街づくり 家とまちなみ No. 33 1996 3月 住宅生産振興財団 p32
- 28) 住宅が集合する時 宮脇檀 まちなみ大学講義録1 1996 10月 住宅生産振興財団 p 73
- 29) コモンでまちをつくる 宮脇檀建築研究室 1999 丸善プラネット p192
- 30) コモンのあるまち 家とまちなみ No. 40 1999 9月 住宅生産振興財団 p 55
- 31) コモンのあるまち 家とまちなみ No. 40 1999 9月 住宅生産振興財団 p 55
- 32) コモンのあるまち 家とまちなみ No. 40 1999 9月 住宅生産振興財団 p 55
- 33) コモンのあるまち 家とまちなみ No. 40 1999 9月 住宅生産振興財団 p 55

第4章 宮脇壇の住宅地計画・設計の考え方

4.1 人のための空間をつくる

宮脇は一貫して、住宅地内の道路を歩行者のための空間として設計していた。宮脇はそれまで一般的に設計された住宅地内道路について以下のように述べている¹⁾²⁾。

車で走りやすいように幅だけが大きくとられ、機械的にまっすぐで、味気ないアスファルト舗装で覆われた道など、住宅地の道ではない。

道路のランクにしたがって、屈曲や植栽、舗装、外構の種類を細かく変化させたり、周辺の風景を取り込んだり等の配慮が欲しいのだが、そこまでの配慮がなされている例は一般にはごく少ない。

住宅地内の道路は、対象の土地から出来るだけ多くの宅地を取るといった経済面からの視点に立った考え方や、緊急車両の通行などの安全面や、造成工事の手間が増えることなどから直線的な線形になることが多かった。

初期の外構のみの設計しかできなかった事例を除いて、造成を設計するにはほぼ全ての事例でボンエルフ道路を導入している。高須ボンエルフで最初にボンエルフを導入して以来道路の線形を設計できる事例ではボンエルフを使っている。

また、住宅地設計の事例を重ねていくにつれてボンエルフ道路だけでなく、舗装による擬似歩道（ガーデン 54）や、シークエンスを考慮した道路線形（明野ボンエルフ）、等の手法も使い、道路を住人の生活の場として質の高いものにすることを考えていたことが分かる。宮脇は、住宅地を設計する際の考え方として以下のように語っている³⁾。

うんと小さな、歩いている人間のスケールでの、地域に密着したまちなみということをやってみました。

宮脇は、設計に関わったほとんどの住宅地において、道路を車のためだけの空間とすることを避け、人間のための生活空間とすることができるよう工夫をしている。一方、人間の生活には自動車が浸透しており切り離せないものとなっているため歩車分離という手法ではなく、歩行者と車が共存できるための設計を行っている。

このような生活者のための空間として道路を設計するという考え方には、大学時代の恩師吉村からの影響がうかがえる。

4.2 日本らしい街並みをつくる

宮脇は、街並みを構成するものを統一して美しさを作り出すことと多様性を両立しなければならないと考えていた。この統一感と多様性の両立はデザイン・サーベイの経験により得た「日本らしさ」への理解の結果であると考えられる。

街並みを統一するために、外構の統一、舗装の統一、門塀などの後退による生け垣の連続など様々な手法を使っている。しかし、統一感のみを満たす設計をしていても単調な街並みとなってしまう魅力は

生まれにくい多様性を生み出す設計をしなければならないと宮脇は考えていた。

多様性を生み出すために宮脇は複数の住宅地において主に3つの手法を使っている。一つが住宅地内道路におけるシークエンスにおいて周辺の風景の多様性を楽しむというものである。明野ボンエルフでの周辺山並みを眺めつつ変化していく道のシークエンスなどが挙げられる。

二つ目は、コモン一つ一つに多様性を持たせることにより、コモンからコモンへと移動において単調では豊かな風景を楽しませるというものである。これは諏訪野や青葉台ボンエルフ、フォレストエッジなどで取り入れられたコモンごとに異なるコモンツリーを配置する方法で実践されている。他にも青葉台ボンエルフで行われたようにコモンに名前をつけてコモン一つ一つの特色をさらに意識付けするという方法もとっている。

三つ目は、街並みを構成する住宅に多様性をもたせることである。宮脇は、住宅地設計の経験を積み重ねるなかでその必要性を感じるようになった。宮脇は、高須ボンエルフに関して次のように述べている⁴⁾。

この間高須なんかでも、屋根を無彩色に揃えさせて生け垣を揃えて、門塀をそろえたら、メーカーさんが全部外壁を白でそろえてしまったものだから、全部揃ってしまって、違うのはプランだけということになってしまって。そうすると、出来あがってみるとどうも楽しくない。少し色があったほうが良かったかなと。

宮脇は、住宅で多様性を創出することに関して以下のように述べている⁵⁾。

私たちは屋根と塀、外構の部分は揃えて門塀や門柱、表札であるとか、家のかたちや家の外壁などは、出来る限りフリーにしようと提唱しています。

以上のようにして、宮脇は、住宅地を構成する様々な要素を統一したり、自由にしたりすることで、全体として統一感と多様性のバランスを取るように設計していた。こうした宮脇の設計手法については、宮脇が住宅地に関する以下のような考えもあらわれていると考えられる⁴⁾。

私なりに良いというのが二つあって、美しいという、明らかに美しい、景観に属する部分の良いというのと、それから生活にからむ部分で楽しいというもの。この美しいと楽しいの二つがリンクされたときにそれを良いというふうに言う。

4.3 集まれる場所をつくる

4.1 で述べたように宮脇の設計した住宅地において道路は大きな特徴といえるが、もう一つの大きな特徴としてコモンが挙げられる。

一般的なコモンとは、「語源的には「入会地」とされるが、イギリスの集合住宅の広い中庭や、供用の広いオープンスペースを指す用語である。日本の戸建て住宅地で用いる場合は、住戸前にある共用のオープンスペースを際して用いられている」のように説明される¹⁾。

宮脇はコモンという概念を戸建て住宅地に持ち込む際に考えた点について以下のように語っている²⁾。

共有の部分を家の前に線状に残しておく手法もありますが、それを集めて広場ができないかという

考え方が出てきました。これはマンションを考えると駐車場は共有地です。コモンです。その概念を戸建て住宅地に持ち込むことはできるだろうか。

宮脇は児童公園のあり方に関しても問題意識を持ち、小規模でも住宅の近くに遊び場となる空間が用意されているほうがよいとして、以下のように述べている⁷⁾。

幼児たちは母親たちの目が届く玄関前の歩道などで遊ぶのが自然であり、その意味で何十戸にひとつの児童公園が数百メートル離れたところにあるなどというのは幼児用としてはあまり意味がない。小規模なプレイロットを十件おき程度に配置したり、宅地内のカーポートをオープンに扱って、そうした子供の遊び場に利用する方法も有効である。

駐車場をコモンに加えることでよい住環境ができるという考えをもっている。コモンを取り入れた初期はコモン内に駐車場を集め、その駐車場も車が止まっていない時間はコモンの一部としての役割を果たすように考えていた。この点について宮脇は以下のように述べている⁸⁾。

車が置かれていながらなおかつそこで子供が嬉々として遊べる綺麗な広場にしたい。

ここまでのコモンに関する言葉からはコモンに関して、駐車スペースと遊び場、広場を両立するための役割を意識していることがわかる。

しかし、宮脇の考えるコモンの役割は変化していく。まず、駐車スペースはコモン内に設けるのではなく、宅地内に設けられるようになる。これには、駐車スペースは利便性や専有意識の高さから車と住宅の距離が近いことが求められているということが分かったこと、また自動車の普及が進み1戸の住宅に付き1台の駐車場では十分ではなくなったことが関係している。そうした変化の中で、コモンはコミュニティを形成するためのものとして作られるようになったと考えられる。宮脇は、コモンの果たす役割に関して以下のように述べている⁹⁾。

人が集まって住むところには人々が集まれる場所が必要なことだけは誰もが指摘すること。様々なかたちの、決して見せ掛けだけで死んでいるのではない、生き生きと人が溢れるような、そんな広場を無数にちりばめたいと思う。家と家、人と人、大人と子供、自然と人工、そんなものを結び合わせる役目を持たせて。

この考えの転換は住宅地設計の経験の中から生まれたもののようだ。過去に設計した住宅地の後の利用状況を見てこのように述べている¹⁰⁾。

各戸の出入り口がコモンスペースに面して作られているわけですから、嫌でも皆の顔が会い、近所付き合いがはじまります。コモンにモミの木を植えておくとかならずだれかクリスマスの飾り付けをします。それから、架台を作っておくと、鯉のぼりを立てるところは各戸にはありませんから、これに鯉のぼりを立てる人が出てきます。やがては月見を始めるようにもなります。バーベキューをやる人も出てきます。こうしてコミュニティが出来るのです。

宮脇は、当初は目的としていなかったコモンでのコミュニティ形成がなされることを発見したのである。そしてその発見があったため、コミュニティの形成を目的としてコモンを取り入れるようになったと考えられる。この発見以降、コモンが近隣の結びつきをより強くする装置となるように、屋向きや住宅のプランを工夫している。

それに加え、コモン同士をクラスター型に配置してコモン同士を集散道路やフットパスにより繋ぐことにより、コモン間にも関係を持たせて住宅地全体としてのコミュニティが成立するような設計をしている。

4.4 時間に育まれる風景をつくる

住宅地は竣工されてから数十年という長期間にわたりそこに存在し、住民の生活の場となる。宮脇事務所でアーバンセクション（住宅地担当）であった平山氏は、以下のように述べている。

街がそうやって熟成していく過程においては代わっていくっていうのは、それは必ずしも良い方向ではないかも知れないけど、街として生きている以上はどんどん変わっていく。

宮脇がコモンのコミュニティに対する効用を発見したときに、住民によるコモンの使われ方を語っていたように、設計したものがどのように使われているかを意識していたことが分かる。住民により使われることにより住宅地が良好な生活空間として熟成されていく。

また、住民によるまちなみの創出を想定した設計は緑の計画に関しても以下のように考えを述べている¹¹⁾。

最初ちょっと石垣をつくり木を植えておくと、後は住民のほうがかきちんとフォローして自分で木を植えている。やっぱり全部最初から植えてえてしまったら、決してああいった街にはならないし逆に最初から一本も植えなかったら誰も後についてきてくれないです。誘い水的に誰かがインフラをしておく、その辺の計画が大切。

このように、住民の生活や街づくりへの関与を見越してそれを誘発するような設計をしていたことが分かる。

一方、住民によるまちなみへの働きかけは常に良い方向へと働くわけではない。住宅地の環境を守るために必要な事として以下のような点をあげている¹²⁾。

皆が生活していく町や環境を守っていくのは、そこに住む人全体で行っていかなくてはならないことだ。そこでは、個人の身勝手な欲望はある程度制限されてもやむを得ない。

以上のように良好なまちなみを保つためにはある程度全体のために個人が抑制される部分が必要だと考えた宮脇は、「5つのハードと1つのソフト」で挙げている管理計画により、時間を経ても良好な住環境が保たれるように考えている。

また、新しく開発された住宅地はそれぞれ異なるところから入居者が集まるため初めからコミュニティが存在することはない。同じ住宅地で生活する中ではぐくまれていくものである。そのため、コミュニティを形成する舞台としてコモンを作り、そのなかで近隣と係わり合いを持つきっかけを作った。

まちなみの保全や、コミュニティ形成に関してそれを念頭において設計した宮脇は住宅地が刻む時間を考えていたということが分かる。

4.5 小結

住宅地に関して、宮脇が考えたことは「人のための空間をつくる」「日本らしい街並み（＝秩序と多様性）をつくる」「集まれる場所をつくる（コミュニティの形成）」「時間とともに育まれる風景をつくる」ことであった。宮脇は、ボンエルフやコモンを特徴とした計画・設計手法と「5つのハードと1つのソフト」という考え方に代表されるような設計のマニュアルを示し、構造物の設計と管理計画の策定の組み合わせにより、そうした「人のための空間をつくる」「日本らしい街並み（＝秩序と多様性）をつくる」「集まれる場所をつくる（コミュニティの形成）」「時間とともに育まれる風景をつくる」といった条件を満たした住宅地を実現しようとした。

「人のための空間」「日本らしさ」に対する宮脇のこだわりには、恩師吉村順三の影響が色濃くあらわれている。また、「日本らしい街並み」に関する宮脇の理解は、デザイン・サーベイの経験の結果であろう。さらに、宮脇は、日本の都市状況に対して、その「全体性」と「リアリティ」への意識を取り戻さなければならないと考えており、ここにも学生時代に師事した高山英華と吉村順三の影響がみられた。

宮脇が住宅を重要視したのも、我国で住宅建設が主に民間に委ねられている一方で、それが集合すると公共的な役割を担うからであったと考えられる。宮脇の住宅地に対する考えや彼が体系化した方法論は、我国の都市における「全体性」と「リアリティ」の欠如に対する宮脇の挑戦であったと言えよう。

引用文献

- 1) 暮らしをデザインする 宮脇檀 1995 丸善 p122
- 2) 都市住宅 1985 鹿島出版会 p41
- 3) 家とまちなみ 1987 12月 住宅生産振興財団 p33
- 4) 家とまちなみ 1983 1月 住宅生産振興財団 p17
- 5) まちなみ大学講義録1 宮脇檀 1996 住宅生産振興財団 p73
- 6) 家とまちなみ 1983 1月 住宅生産振興財団 p16
- 7) 都市住宅 1985 鹿島出版会 p44
- 8) 家とまちなみ 1982 7月 住宅生産振興財団 p14
- 9) 暮らしをデザインする 宮脇檀 1995 丸善 p134
- 10) まちなみ大学講義録1 宮脇檀 1996 住宅生産振興財団 p76
- 11) 家とまちなみ 1987 12月 住宅生産振興財団 p34
- 12) 都市に住みたい 宮脇檀 1992 PHP 研究所 p166

第5章 結論

5.1 本研究の成果

5.1.1 各章の成果

本研究では、これまで評価されることが少なかった宮脇の住宅地に着目して、その計画・設計の考え方を明らかにした。

第2章では、宮脇、吉村、高山に関連する文献のテキスト分析により、住宅地を設計するまでの宮脇の経歴と建築家としての考え方について、以下の点を明らかにした。

- ・大学や大学院時代に吉村順三や高山英華に師事したことにより影響をうけて「リアリティ」のあるものを作る意識と、「総合的」に「全体」を作りあげること、という考えが形成されていた。
- ・建築家となった後の研究や建築作品からは「街並みに対する強い意識」が表れている。これも吉村や高山の影響が考えられる。

第3章では住宅地の設計手法について宮脇自身が述べているテキストの分析、関係者へのヒアリング調査、現地調査により宮脇の住宅地設計の手法がどの様に形成されていったのかについて、以下の点を明らかにした。

- ・設計手法が、「外構の統一」や「ボンエルフ」は初期の段階から取り入れて統一感のある街並みをつくりつつ、人間の生活を中心に考えた設計を行っていた。
- ・初めは苦肉の策として取り入れた「コモン」は後にコミュニティの形成という役割を持たせて多用され、さらに道路や住宅との有機的関係を持つものとして「クラスター型コモン」へと洗練されていった。
- ・維持管理や建替え時の規則となる建築協定や緑化協定、管理計画などのソフト面の整備も行った。

第4章では、第2章・第3章で得られた知見をもとに、宮脇が住宅地を設計する際に考えていたことについて以下のように考察した。

- ・住宅地設計を概観してみると、「人のための空間を作る」「日本らしい街並み（＝秩序と多様性のある街並み）」「集まれる場所を作る（コミュニティの形成）」「時間とともに育まれる風景をつくる」という基本的な考え方があった。
- ・これらの考え方を実現するため、「5つのハード、1つのソフト」という設計のマニュアルをまとめている。
- ・我国の都市に対し、住宅の供給が民間に任されることになった結果としてそれぞれが孤立している現状に問題意識を持っていた。そこで住宅地において上に挙げたような考え方にもとづいて住宅地設計を行うことにより「全体」や「リアリティ」の欠如へと挑戦していたと考えられる。

5.1.2 住宅地設計に見る建築家宮脇の特徴

宮脇は住宅作家としては主に以下のような評価がなされている。¹⁾²⁾³⁾

一貫して生活というものをリアルに受け止めるという建築家で、完結性を全うしたわけですね。（原広司）

「生活」にこそ建築家はこだわるべきであるという正論を言って、リアリズムの住宅をつくったわけ

です。(隈研吾)

身体と空間に対する倫理感覚が強く現れていて、シンボリックな空間であるよりも、建築の表現と「生活」というものをどう調停しようかということに必死の思いという幹事があると思います。(山本顕理)

以上のような建築家たちの言葉からもわかるように、宮脇は住宅に関しては人間の生活を見つめその生活に対しリアリティのあるものをつくるという評価がなされた建築家であった。住宅設計の際に持っていたこのような生活者のための空間を作るという考え方はコモンやボンエルフ道路といった住宅地の公共空間の設計においてもあらわれている。このことから、住民の生活に対し「生活空間としてのリアリティ」がある設計は住宅も住宅地でも一貫して考え、取り組んでいたという点が明らかになった。

本研究で住宅地設計の考え方について研究することにより、住宅作品としては、周囲の混乱した街並みに対して「断絶」した建築を作ることによって街並みへ挑戦していた建築家・宮脇檀が、住宅地においては、日本の集落の状態を参考にしつつ全体として総合的な設計をすることで「調和」した街並みをつくるという手法を取っていたという事実が明らかになった。

住宅における手法と、住宅地における手法は異なっているものの、都市や住環境をそこで生活する人間のために作り上げていくという理想は同一であったことが読み取れた。このようにして宮脇の住宅地計画・設計の考え方を研究することにより「全体」としてのまとまりや「街並みへの意識」などの宮脇の考えを明らかにした。これにより、これまでの住宅を中心とした宮脇の評価研究に対し、住宅地設計の考え方という新たな知見を与えられた。

5.2 今後の課題

本研究では、宮脇が当時の都市の状況に疑問を持ち、それに対し住宅や、住宅地においてそれぞれの手法を用いて挑戦していたことが明らかになった。それに加え、宮脇は住宅地の社会における位置づけに対しても問題意識を持っており、それを踏まえ、その宮脇の挑戦が現在の住宅地設計のプロセスや、社会的位置づけに対しどういった影響を与えたのかという点は明らかになっていない。今後は、現在の都市の持つ問題に対し、いかなるアプローチが必要なのかという点に関する研究が必要である。

引用文献

- 1) 住宅という場所で TOTO 出版 2000 年 p13
- 2) 住宅という場所で TOTO 出版 2000 年 p15
- 3) 住宅という場所で TOTO 出版 2000 年 p22

謝辞

今回の卒業論文執筆に当たって本当にたくさんの方のお世話になりました。

樋口明彦准教授には論文ゼミでの冷静かつ的確な指摘をいただき、宮脇檀という研究対象だけにのめり込みがちになっていた私の考えを引き戻して、より広い視野をもつことの大切さを教えてくださいました。それに加え、卒業論文試問会の前には、内容の伝わる発表の準備の仕方についても多くのご指導を頂きました。

高尾忠志特任助教には論文を完成させる上で全ての点において指導してくださいました。研究室全体のゼミだけでなく、忙しい合間を縫って個別の小ゼミも開いてくださり、こまめに論文への指導をしていただきました。

また、論文の執筆が初めてであったため分からないことも多く、考えを伝える際に必要なポイントを示してくださいました。初めての経験で論文の進め方について右も左もわからない中で、高尾特任助教は論文の内容にも、表現の仕方も考慮した指導をいただきました。

発表前日には無理を言って遅くまで残っていただき、論文の論点の整理や発表で取り上げる内容についての議論に付き合ってくださいました。そして、卒業論文執筆に係わる指導の中で論文の進め方に加え、論の構築の仕方や文の組み立て、発表の際の考慮すべき点など全てを教えてくださいました。

徳永哲氏には本研究に際して元宮脇建築研究室職員の平山郁朗氏をご紹介いただきました。なかなかコンタクトをとりづらい関係者の方をご紹介いただき、研究を進める上で大変助けていただきました。

そして、徳永氏からご紹介いただいた元宮脇建築研究室・アーバンセクション職員の平山郁朗氏にはお忙しい中にもかかわらず、ご自身の事務所に招き入れていただき、3 時間にもわたりヒアリング調査にご協力いただきました。

平山氏へのヒアリング調査は私にとって初めてのヒアリング調査でしたので、不慣れな進行であったにも係わらず用意したヒアリング項目に当時を思い出しながらひとつひとつ丁寧にお答えいただきました。それだけでなく、研究の切り口や進め方などまで親身になってアドバイスをいただき大変有意義なヒアリング調査となりました。

また、発表当日には研究室メンバー皆様の前で発表練習をさせていただきました。発表の内容や、話し方、時間配分など忙しい中多数アドバイスをいただきました。当日の発表練習によって試問会での発表を無事に済ませることが出来たと感じています。

最後に私の両親に感謝したいと思います。離れた土地に住みながらも、いつも私を支えてくれました。自分の興味のあることについて学び、論文を書くことができたのも両親のおかげだと実感しています。ありがとう。

小川 正人